

第六部 教育・文化・体育編

第一章 学校教育

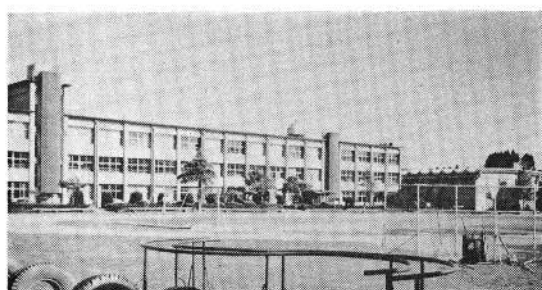
初版では昭和四十七年度までを主として編集しているが、その後空港の開港とともに、本町もめまぐるしい変遷を遂げてきた。以下順を追って学校教育における変化をとりあげてみたい。教育一〇〇年の歩みは初版において収録されているが、その後約一〇年の間に、学校教育面において二、三の大きな変化があった。

その一は、人口の減少及び校舎の老朽化に伴い、玉利中学校を溝辺中学校に統合し一町一中学校とするか、また空港開港に伴い玉利中学校区も人口の流入により人口増が予想されるので、新校舎を建設し一町二中学校として存続すべきか―の意見が対立したため、その結論を見いだすべく、教育委員会・議会・町の三者が一体となり、あらゆる面から真剣に検討が繰り返された。その結果、将来において空港周辺にあつては、人口が増加するであろうとの見通しにたち、麓字上原に地権者各位の理解と協力により新敷地を取得、新校舎建設のゴーサイン

が出され、昭和五十六年から建設に入り昭和五十七年四月からその名も「陵南中学校」と改称され、現在に至っている。

次に石峯地区の通学区問題について触れておきたい。

この地区は、小学校は陵南小へ、中学校は溝辺中へ通学するという形態が長年続いていた。その原因についてはいろいろの要因があったと思われるが、毎年入学期には



溝 辺 小 学 校

通学区変更届が出され、教育委員会もその取り扱いに苦慮していた。その間教育委員会は、議会や町との協議を重ねつつ、石峯地区の父兄との話し合いを行い、規則どおりの通学が行われるよう、説得に努力してきた。しかし、正常化は遅々として進まず、繰り返し話し合いが持たれた結果、昭和六十年正規の運営がな

されることになった。学校運営の正常化の面からその効果は大きなものがある。

一 溝辺小学校

初版で、昭和四十七年度までの推移は詳しく述べられているので、四十八年度以後の動きを記述する。

空港の開港に伴い、その騒音は相当なものであることから、各校順次航空機騒音対策事業によって防音工事を施行することとなったが、本校の校舎は昭和四十九年度から移転を伴う建設が始まっている。

49 有川字石塚へ用地二万五一二九平方メートルを取得、造成に着工

50・2 第一次新校舎建設着工。六一七平方メートル。総工費五四五万六〇〇〇円（財源内訳Ⅱ運輸省補助四〇〇一万三〇〇〇円、起債一〇〇〇万円、町費四五四万三〇〇〇円）

50・8 第二次校舎建設着工。校舎二二四七平方メートル。講堂八二〇・五平方メートル。機械室一五〇・五平方メートル。総工費三億二三七七万円（財源内訳Ⅱ運

輸省補助一億四四六万五〇〇〇円、起債七六五〇万円、町費一億二五八万五〇〇〇円）

51・3 校舎、講堂完工

51・11 除湿工事一七九五平方メートル完工。総工費三四八四万円（財源内訳Ⅱ運輸省補助三〇一六万三〇〇〇円、起債四四〇万円、町費二七万七〇〇〇円）

51・11 創立一〇〇周年記念式（27日）

52・9 ステンレスプール及び補助プール建設（二五メートルコース）総工費二一五万四〇〇〇円（財源内訳Ⅱ文部省補助六六九万八〇〇〇円、起債一四八〇万円、町費三四万四〇〇〇円）

61・12 児童数の増加によって、普通教室が不足になったため、特別教室を普通教室に改造し、新たに音楽教室と保健室を建設。面積一九八平方メートル。総工費二七六万一〇〇〇円（財源内訳Ⅱ文部省補助一二五七万八〇〇〇円、起債一〇一〇万円、町費四九八万三〇〇〇円）

〔歴代校長・PTA会長〕（昭和四十七年度以降）

初版で誤りがあったので次のように訂正しておきたい。

(代) (氏 名) (任 期)

一五 福永嘉之助 明四三・四〇一・三・三

一六 木佐木忠志 大一三・四〇一・四・三

一七 峯守 利親 大一四・四〇昭三・三

(以下各代を一代ずつ繰り下げ)

○歴代校長

(代) (氏 名) (任 期) (出身地)

二九 前田 義一 昭四六・四〇一・四八・三 鹿児島市

三〇 肥田 博 四八・四〇一・五〇・一〇 加治木町

三一 伊瀬地三郎 五〇・一〇一・五三・三 頤娃町

三二 前田 利武 五三・四〇一・五七・三 吉松町

三三 土屋 武彦 五七・四〇一・六一・三 出水市

三四 辻 三男 六一・四〇一 蒲生町

○PTA会長

一三 松山淳一郎 四七・四〇一・五〇・三

一四 今吉 耕夫 五〇・四〇一・五三・三

一五 宗像 健 五三・四〇一・五五・三

一六 重丸 諄一 五五・四〇一・五六・三

一七 神田橋景光 五六・四〇一・五八・三

一八 木場 幸一 五八・四〇一・五九・三

一九 池田 弘行 五九・四〇一・六一・三
二〇 満塩 時政 六一・四〇一・六二・三
二一 森田 二男 六二・四〇一

二 陵南小学校



本校は、昭和四十三年に新校舎が現在地に完工したこ

とにより、同年二月十日

玉利教場、馬立教場を閉

校し、陵南小学校として

開校したことは、初版に

述べられているが、四十

七年の空港開港により、

飛行場に近接しているた

め、防音工事が施工され

ることとなった。

また開校当時から学校

緑化の努力が実り、現在

まで毎年のように各種緑

化コンクール入賞の実績

をあげている。

- 48・10 第一次防音改造工事。一三四九平方 m 、総事業費二六三二万八〇〇〇円（財源内訳Ⅱ運輸省補助二六三一万八〇〇〇円、町費一万円）
- 50・1 第二次防音改造工事。三八〇平方 m 、総事業費一八二万四〇〇〇円（財源内訳Ⅱ運輸省補助一一四四万円、町費三八万四〇〇〇円）理科設備を完備
- 51・2 第一回全国花いっぱいコンクール最優秀校、学校緑化コンクール優秀校
- 51・11 除湿工事、機械室工事。八八二平方 m 、総事業費二九五八万円（財源内訳Ⅱ運輸省補助二九〇六万二〇〇〇円、町費五一万八〇〇〇円）
- 52・12 各教室にカラーテレビ設置
- 53・10 「花と緑の学校づくり」県研究公開
- 56・4 「読書指導」県研究協力校の指定を受ける
- 57・11 県研究協力校「読書指導」研究公開

59・5 全日本学校環境緑化コンクール入賞、第三五

60・4 回全国植樹祭で県知事より感謝状を受ける。児童数の増加に伴い、教室の不足をきたすこととなったため、特別教室六、準備室二を建設。七四七平方 m 総事業費八一八万円（財源内訳Ⅱ文部省補助四一一五万五〇〇〇円、起債三七〇〇万円、町費三七二万五〇〇〇円）

61・1 始良地区国語研究公開

61・3 学校環境緑化モデル校の指定を受ける

62・9 全日空より敷地を購入、講堂新築に着工。面積九〇五平方 m

〔歴代校長・PTA会長〕

○歴代校長

(代)	(氏 名)	(任 期)	(出身地)
二八	須賀 立雄	45・4 ~ 48・3	横川町
二九	吉川 義則	48・4 ~ 49・3	大崎町
三〇	武田 二夫	49・4 ~ 51・3	知覧町
三一	笛田 武則	51・4 ~ 55・3	隼人町
三二	坊地 勝	55・4 ~ 57・3	国分市

三三 福沢 求生 57・4・60・3 串良町
 三四 荒田 耕 60・4・ 栗野町

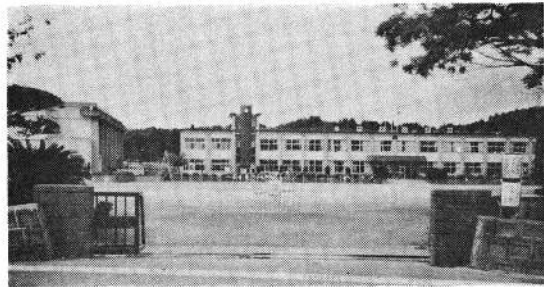
○PTA会長

中馬 隼人 47・4・48・3
 福永 忍 48・4・51・3
 玉利 敏也 51・4・52・3
 山下 勝義 52・4・56・3
 笹峯 護 56・4・57・3
 山下 勝義 57・4・58・3
 野村 恵 58・4・60・3
 有村 秀忠 60・4・62・3
 笹峯 純隆 62・4・

三 竹子小学校

本校は初版においては木造校舎で記述されているが、その後航空機騒音対策事業により新築されている。学校位置には変更はなかったが、敷地を購入、面積を拡張し、校舎の位置は全面的に移動した。

49・5 校門完成



竹 子 小 学 校

54・3 第一期工事完

工(鉄筋校舎)。面積一八九二平方
 以、総事業費二億五〇九万九〇〇〇円
 (財源内訳)
 運輸省補助一億二八四一万六〇〇〇円、
 起債七二八〇万円、町費三

55・3
 54・4

八八万三〇〇〇円)
 新校舎に移転

第二期工事完工(体育館)。面積六二九平方以、
 除湿併行工事一〇九〇平方以、総事業費一億四一三万二〇〇〇円(財源内訳)運輸省補助八三一七万八〇〇〇円、文部省補助七四九万二〇〇〇円、起債三一九〇万円、町費一八

五六万二〇〇〇円)

ピアノ、ステージ幕購入

55・11 校舎・体育館落成記念式、創立一〇〇周年記念式

念式

56・4 山坂達者研究推進校指定(昭和五十七年まで)

で

57・4 体育研究推進協力校

57・9 アスレチック施設整備

58・4 町教育方法改善協力校

58・12 FRP製補助プール完工(十一日×四日)。総工費四二万五〇〇〇円

59・5 緑の少年団全国植樹祭に参加

60・10 校長住宅完成

61・4 地区教育方法改善研究協力校(昭和六十二年度まで)

61・8 プール更衣室竣工

61・10 親子読書会県表彰を受ける

62・3 緑の少年団県表彰を受ける

〔歴代校長・PTA会長〕

○歴代校長

代氏 名 任 期 出身地

二三 赤塚 真敦 44・3～49・3 吉松町

二四 瀬戸口信海 49・4～52・3 国分市

二五 鋤先 京平 52・4～55・3 長島町

二六 鈴木 平一 55・4～59・3 福山町

二七 海江田幸雄 59・4～ 隼人町

○歴代PTA会長

一〇 延時 力蔵 44・3～49・3

一一 川口 孝雄 49・4～52・3

一二 剥岩 重男 52・4～53・3

一三 野村 茂 53・4～56・3

一四 藤沢 征人 56・4～59・3

一五 岩崎 勝馬 59・4～61・3

一六 中久保 稔 61・4～

四 溝辺中学校

本校は、昭和四十四年十二月火災により焼失したが、移転を予定し建築中であつた新校舎が四十五年五月に竣工、移転が行われた。しかしながら、新空港開港以前の



溝 辺 中 学 校

建設であったため、開港
後航空機騒音対策事業に
よる改造が全面的に行わ
れた。

48・11 第一期改造工

事完工。改造

二六一〇平方

呎、除湿一六

九六平方呎、

機械室八九平

方呎、総事業

費六八〇三万

九〇〇〇円

(財源内訳＝運輸省補助六七六三万五〇〇

円、町費四〇万四〇〇〇円)

理科園の設置

校門竣工

50・3
53・1

第二期改造工事完工。技術科室三一五平方

呎、機械室一五・七五平方呎、総事業費三四

一一万二〇〇〇円 (財源内訳＝運輸省補助二

五五六万一〇〇〇円、起債八〇〇万円、町費
五五万一〇〇〇円)

53・3 下校庭大ヒノキ伐採

下校庭への歩道設置(四二〇万円)

歩道橋完工(一〇五〇万円)

54・6 北部バレー大会優勝

下校庭鉄筋更衣室竣工

54・8 地区新人庭球大会優勝

55・3 地区庭球大会優勝(女子)

55・5 放送施設一式設置(デスク型)

郡野球大会優勝

56・8 サークットコース設置(八〇万円)

56・11 鹿児島市子供美術展学校賞金賞受賞

57・4 県山坂達者実践推進校となる

57・6 地区陸上(三種目総合)優勝

57・7 地区野球大会優勝(県大会出場)

58・7 地区野球大会優勝(県大会出場)

地区弓道大会優勝(県大会出場四位)

59・6 県弓道大会優勝

59・7 地区野球大会優勝(県大会出場)

59・8 九州弓道大会出場(男六位、女四位)

一二 中島 清隆 58・4ゝ62・3 加世田市
一三 兼廣 晨史 62・4ゝ 鹿兒島市

60・3 地区野球大会優勝(県大会出場)

○PTA会長

60・4 庭球コート拡張工事及びフェンス新設工事

野間 勝實 48・4ゝ49・3

60・8 九州庭球大会個人戦出場(女子)

黒木 公博 49・4ゝ50・3

九州弓道大会団体、個人戦出場

今吉 正人 50・4ゝ53・3

60・11 地区指定生徒指導研究公開

松山 浩 53・4ゝ54・3

60・12 下校庭グラウンド拡張、野球場整備、フェンス新設工事完了

県環境緑化コンクール入選表彰(県民の森)

川口 孝雄 54・4ゝ55・3

61・3 県野球大会三位

今吉 耕夫 55・4ゝ56・3

61・7 九州弓道大会団体五位、個人優勝(時任勝宏)

有村 四郎 56・4ゝ58・3

61・8 全日本少年弓道錬成大会で男子、女子ともバ

宗像 健 58・4ゝ60・3

63・7 1ト優勝

神田橋景光 60・4ゝ61・3

〔歴代校長・PTA会長〕

○歴代校長

五 陵南中学校

代 氏 名 任 期 出身地

九 今別府良春 45・4ゝ50・3 財部町

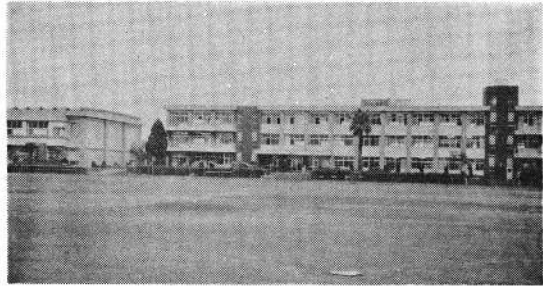
一〇 海江田勇蔵 50・4ゝ54・3 福山町

一一 長井 彰一 54・4ゝ58・3 坊津町

一町二中学校存続の決定がなされ、新敷地に移転した

ことはさきに述べたが、その内容について詳述する。本

校は将来の人口増による生徒数の増加を見込んで、二



万四三四六平方呎の敷地に、普通・特別教室一六、その他管理室、屋内体育館と、余裕をもって建築された。広々とした校舎で、伸び伸びと生徒たちが勉学にいそしんでいる。

56・3 玉利中学校校舎建設用地決定(麓字上原)

56・8 新校舎建設起工式。面積二

四九四平方呎、機械室一五四平方呎、総事業費三億六二八万五〇〇〇円(財源内訳Ⅱ運輸省補助六二七万七〇〇〇円、文部省補助五五三六万円、起債八〇三〇万円、町費一億六四四八万八〇〇〇円)

57・3 新校舎竣工、移転

57・4 「溝辺町立陵南中学校」と校名改称

57・8 体育館建設着工。八五〇平方呎、総事業費一億五九六三万七〇〇〇円(財源内訳Ⅱ運輸省補助四七五万六〇〇〇円、文部省補助三五四〇万四〇〇〇円、起債三八七〇万円、町費三七九七万二〇〇〇円)

58・2 体育館完工

58・7 地区野球大会準優勝(県大会出場)

58・11 地区中学校新人陸上大会優勝

58・11 FRPプール完成(二五呎×一五呎、七コー

ス)総事業費四一〇二万九〇〇〇円(財源内訳Ⅱ文部省補助九六五万円、町費三一三七万九〇〇〇円)

金工、木工室竣工。面積一五三平方呎、総事業費一五〇〇万円(町単独)

59・2 校舎落成式及び創立三〇周年記念式典

59・7 地区総体弓道大会優勝

59・11 高尾野鶴駅伝優勝

60・2 地区中学校女子駅伝優勝

60・3 弓道場完成

60・7 始良北部バレー優勝

60・10 始良北部野球優勝

60・11 高尾野鶴駅伝女子優勝

61・2 地区研究協力校「教育方法改善」研究

61・10 始良北部バレー優勝

62・12 始良北部バレー優勝

63・3 始良北部野球優勝、県大会出場

〔歴代校長・PTA会長〕

○歴代校長

代	氏名	任期	出身地
七	伊地知秀忠	48・4～49・3	菱刈町
八	松元直定	49・4～52・3	始良町
九	伊藤定輝	52・4～53・3	加治木町
一〇	倉元良吉	53・4～56・3	吹上町
一一	竹ノ内哲郎	56・4～62・3	鹿児島市
一二	下尾崎正信	62・4～	川内市

六 陵南幼稚園

福永 忍 52・4～54・3

玉利 敏也 54・4～55・3

松田 拓郎 55・4～56・3

馬場 和美 56・4～57・3

今吉 康己 57・4～59・3

笹峯 護 59・4～60・3

今吉 康己 60・4～61・3

野村 恵 61・4～

○PTA会長

福永 正人 48・4～49・3

徳富 武次 49・4～50・3

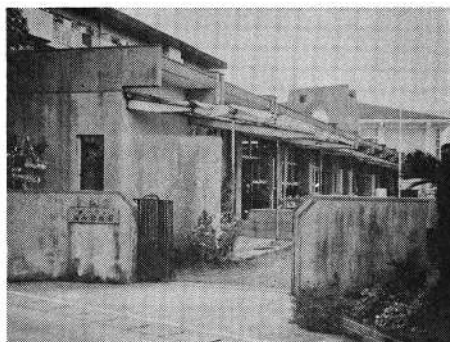
中馬 隼人 50・4～51・3

末元 正己 51・4～52・3

本園は初版で陵南小学校に併設され発足したことは述べられているが、その後昭和五十一年度に園舎が建設されている。定員も八〇名となり、園長・副園長の、陵南小校長・教頭の兼務には変更がないが、職員は教諭二名、事務兼養護教諭一名の計三名である。本園の校区は、町内一円であり、園教育に対する関心は高く、質的にも向上の途にあるといえよう。

なお、年度別推移は第140表のとおりである。

48・3 第一回卒園式（男子一〇名、女子九名）



陵南幼稚園

61・4

緑化町研究協力幼稚園に指定

60・3

園庭整備（遊具の更新並びに移動）

〇円

園舎完工。二九九平方呎、総工費三九一八万七〇〇〇円（財源内訳Ⅱ運輸省補助一四七四万六〇〇〇円、文部省補助七五二万八〇〇〇円、起債一四二〇万円、町費二七一万三〇〇〇円）

52・3

園舎完工。二九九平方呎、総工費三九一八万七〇〇〇円（財源内訳Ⅱ運輸省補助一四七四万六〇〇〇円、文部省補助七五二万八〇〇〇円、起債一四二〇万円、町費二七一万三〇〇〇円）

る。成とな学級編児、二五歳式。四入園第五回開きプール

51・4

49・7

第140表 陵南幼稚園の園児数推移

		47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
年少組	男	／	／	／	／	17	11	12	17	11	18	20	19	13	16	19
	女	／	／	／	／	10	18	21	21	17	22	20	15	14	11	19
	計	／	／	／	／	27	29	33	38	28	40	40	34	27	27	38
年長組	男	／	／	／	／	12	25	16	15	19	13	19	21	22	18	20
	女	／	／	／	／	19	14	19	21	21	13	21	19	18	14	17
	計	／	／	／	／	31	39	35	36	40	26	40	40	40	32	37
合計	男	10	／	／	17	29	36	28	32	30	31	39	40	35	34	39
	女	11	／	／	16	29	32	40	42	38	35	41	34	32	25	36
	計	21	32	41	33	58	68	68	74	68	66	80	74	67	59	75

七 教育委員会

児童・生徒の推移、体位比較などは第141～143表および
第48・49図のとおりである。

〔歴代教育長・教育委員〕

年度	委員長	教育長	委員
四八	松山 績	佐方 直	山村 覚一 岩元 義哉 岩元 静男
四九	松山 績	佐方 直 (三月辞任) 榎園 高雄 (四月就任)	山村 覚一 岩元 義哉 岩元 静男
五〇	松山 績	榎園 高雄	山村 覚一 岩元 義哉 岩元 静男 (九月辞任) 村田 三夫 (十月就任)
五一	松山 績 (九月辞任) 村田 三夫 (十月就任)	榎園 高雄	山村 覚一 岩元 義哉 松山 淳一郎 (十月就任)
五二	村田 三夫	榎園 高雄	山村 覚一 (三月辞任) 松山 淳一郎 岩元 義哉 米丸 光武 (三月就任)

五三	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 岩元 義哉 米丸 光武
五四	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 岩元 義哉 米丸 光武
五五	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 岩元 義哉 米丸 光武
五六	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 米丸 光武 岩元 義哉 (九月辞任) 徳永 重幸 (十月就任)
五七	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 米丸 光武 徳永 重幸
五八	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 米丸 光武 徳永 重幸
五九	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 米丸 光武 徳永 重幸
六〇	村田 三夫	榎園 高雄	松山 淳一郎 米丸 光武 徳永 重幸
六一	村田 三夫	榎園 高雄 (九月辞任) 萩田 三郎 (十月就任)	松山 淳一郎 米丸 光武 徳永 重幸

第141表 児童生徒のうつりかわり

学 校 名	年 度	56	57	58	59	60	61
溝 辺 小 学 校	児 童 数	259	280	276	304	321	353
	学 級 数	9	10	10	11	12	13
陵 南 小 学 校	児 童 数	248	244	249	263	268	294
	学 級 数	7	7	8	9	10	11
竹 子 小 学 校	児 童 数	81	90	98	95	112	106
	学 級 数	6	6	6	6	6	6
計	児 童 数	612	588	614	623	662	701
	学 級 数	23	22	23	24	26	28
溝 辺 中 学 校	生 徒 数	196	184	184	183	180	168
	学 級 数	7	7	7	7	7	7
陵 南 中 学 校	生 徒 数	91	104	109	117	115	116
	学 級 数	3	3	3	3	3	3
計	生 徒 数	287	288	293	300	295	367
	学 級 数	10	10	10	10	10	10

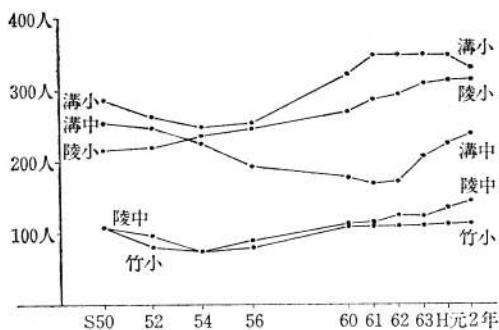
② 溝辺小学校、溝辺中学校は特殊学級を含む。

第142表 児童生徒・学級数の将来の推移

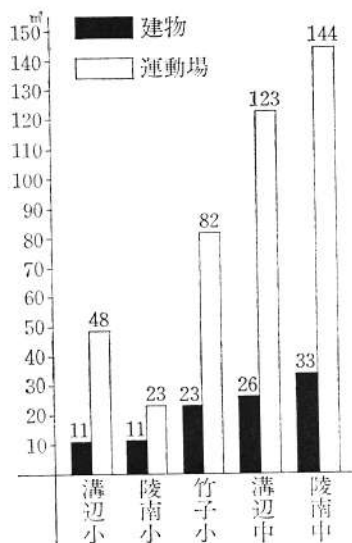
学 校 名	年 度	60	61	62	63	平成1	2
溝 辺 小 学 校	児 童 数	321	348	349	348	349	332
	学 級 数	12	13	13	13	13	12
陵 南 小 学 校	児 童 数	268	290	295	308	317	319
	学 級 数	10	11	11	12	12	12
竹 子 小 学 校	児 童 数	112	109	109	111	113	112
	学 級 数	6	6	6	6	6	6
計	児 童 数	701	747	753	767	779	763
	学 級 数	28	30	30	31	31	30
溝 辺 中 学 校	生 徒 数	180	164	169	205	225	240
	学 級 数	7	7	6	6	6	6
陵 南 中 学 校	生 徒 数	115	116	124	122	138	142
	学 級 数	3	3	4	4	5	5
計	生 徒 数	295	280	293	327	363	382
	学 級 数	10	10	10	10	11	11

(61. 10. 1 住民基本台帳)

第48図 児童生徒数の過去から将来への推移



第49図 児童生徒1人当りの建物及び運動場の保有面積(61年施設台帳)



第143表 全国、県及び本町の児童、生徒体位比較

身長(昭和57年度)

性	年齢 学校名	小 学 校						中 学 校		
		6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国	115.9	121.5	127.0	132.2	137.3	142.8	149.8	157.3	163.6
	本 県	115.1	129.4	125.6	131.0	136.0	141.8	147.8	155.7	161.9
	本 町	114.0	119.6	124.5	130.5	136.4	138.3	146.0	155.0	162.9
	溝 辺	114.5	118.0	124.4	129.0	135.4	139.8	147.9	154.9	161.5
	陵 南	114.6	120.8	125.5	134.3	138.3	141.5	144.0	155.3	164.3
	竹 子	112.8	120.0	123.6	128.2	135.4	135.2			
女	全 国	115.2	120.8	126.3	132.0	138.3	145.0	150.6	154.2	156.0
	本 県	114.5	119.5	125.2	130.8	137.6	144.1	149.3	153.4	155.1
	本 町	113.8	119.7	126.1	131.3	137.1	143.3	149.2	153.4	155.9
	溝 辺	113.3	119.6	124.5	130.7	135.5	141.7	149.0	153.2	155.6
	陵 南	115.2	119.7	126.4	132.9	136.9	144.9	149.3	153.5	156.1
	竹 子	113.0	120.0	127.3	130.4	138.8	143.2			

体重(昭和57年度)

性	年齢 学校名	小 学 校						中 学 校		
		6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国	20.9	23.3	26.1	29.1	32.3	36.1	41.4	47.1	52.6
	本 県	20.6	22.5	25.3	28.3	31.3	34.8	39.7	45.5	50.9
	本 町	19.8	22.6	24.1	28.7	31.9	32.3	37.2	44.2	52.0
	溝 辺	20.0	22.6	24.4	28.3	32.0	32.1	38.8	43.1	49.7
	陵 南	18.7	23.2	24.9	31.3	33.4	35.3	35.6	45.3	54.2
	竹 子	20.6	22.0	23.0	26.4	30.3	29.6			
女	全 国	20.5	22.8	25.6	28.8	32.6	37.4	42.5	46.5	49.5
	本 県	20.3	22.1	25.1	27.8	31.9	36.3	41.2	46.0	49.0
	本 町	19.8	22.2	25.7	28.1	32.1	35.8	40.7	45.5	48.9
	溝 辺	19.8	22.1	24.5	28.3	29.6	34.9	41.8	45.5	48.1
	陵 南	20.4	21.9	26.2	28.6	31.7	37.3	39.6	45.5	49.7
	竹 子	19.3	22.5	26.3	27.4	35.0	35.3			

第6部 教育・文化・体育編

胸 囲 (昭和57年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	57.6	59.7	62.1	64.2	66.7	69.3	72.5	76.0	79.6
		本 県	57.2	59.0	61.3	63.7	66.1	68.4	71.3	74.9	78.8
		本 町	56.0	58.8	59.9	63.8	65.3	65.7	68.8	73.3	78.7
		溝 辺	56.4	59.2	60.5	63.3	65.2	65.8	69.0	72.5	77.3
		陵 南	55.5	59.3	61.2	65.3	66.9	68.7	68.5	74.1	80.0
		竹 子	56.0	58.0	58.0	62.8	63.7	62.6			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	56.3	58.2	60.5	63.0	66.2	70.0	74.3	77.1	79.3
		本 県	56.0	57.4	60.1	62.3	65.5	69.3	73.2	76.6	79.0
		本 町	55.1	56.9	60.1	62.1	65.0	68.2	73.4	76.9	79.8
		溝 辺	55.7	57.4	59.1	62.4	63.4	68.0	74.6	77.6	78.7
		陵 南	55.8	56.8	61.5	62.9	65.0	69.1	72.1	76.2	80.8
		竹 子	53.7	56.6	59.8	60.9	66.5	67.4			

座 高 (昭和57年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	65.0	67.5	69.9	72.1	74.2	76.5	79.8	83.5	86.8
		本 県	64.7	66.9	69.3	71.6	73.8	76.1	79.0	82.7	86.0
		本 町	63.6	66.2	68.2	71.5	73.4	74.3	78.5	83.1	87.4
		溝 辺	64.1	66.2	68.4	70.9	73.4	75.0	79.6	82.6	87.3
		陵 南	63.3	66.5	68.4	72.9	74.2	75.0	77.3	83.6	87.4
		竹 子	63.4	65.8	67.9	70.6	72.7	72.9			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	64.5	67.1	69.5	72.1	74.9	78.2	81.4	83.3	84.3
		本 県	64.3	66.6	69.1	71.5	74.6	77.7	80.9	83.1	84.0
		本 町	63.8	66.6	69.6	71.0	74.9	77.4	81.6	83.3	85.5
		溝 辺	63.8	66.7	68.4	70.9	74.4	76.4	81.6	83.4	85.0
		陵 南	64.5	66.3	69.5	72.1	74.9	78.0	81.5	83.2	86.0
		竹 子	63.1	66.9	70.9	70.0	75.5	77.7			

身長(昭和58年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国		116.2	121.8	127.2	132.3	137.4	143.1	150.0	157.5	163.6
	本 県		115.3	120.8	126.3	131.1	135.9	141.6	147.7	156.3	161.9
	本 町		115.3	119.9	126.2	129.8	135.5	141.7	146.2	154.2	162.1
	溝 辺		115.5	120.9	125.6	130.5	134.8	141.0	147.4	155.9	162.5
	陵 南		115.3	119.7	126.8	130.7	138.5	143.8	145.0	152.4	161.7
	竹 子		115.1	119.1	126.1	128.3	133.1	140.2			
女	全 国		115.5	121.0	126.6	132.2	138.4	145.2	150.7	154.3	156.1
	本 県		114.4	120.3	125.6	130.7	137.2	144.7	149.9	153.6	155.2
	本 町		114.3	119.8	126.0	132.2	137.2	143.7	149.7	153.0	155.6
	溝 辺		112.9	119.8	126.5	130.7	137.7	142.7	148.5	152.5	155.1
	陵 南		116.0	120.5	125.3	132.9	138.4	142.4	150.9	153.4	156.0
	竹 子		114.1	119.3	126.1	132.9	135.5	145.9			

体重(昭和58年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国		21.0	23.4	26.3	29.2	32.6	36.5	41.7	47.2	52.8
	本 県		20.5	22.8	25.6	28.4	31.1	35.2	39.3	45.7	51.2
	本 町		20.3	22.5	25.4	27.3	31.3	34.9	38.6	43.2	50.5
	溝 辺		20.9	22.6	25.6	27.3	31.0	34.0	38.8	45.0	50.0
	陵 南		20.1	21.9	26.1	28.5	33.6	36.5	38.3	41.4	50.9
	竹 子		19.9	22.9	24.6	26.1	29.2	34.1			
女	全 国		20.7	23.0	25.7	28.9	32.7	37.7	42.6	46.6	49.4
	本 県		19.8	22.2	25.1	27.9	31.5	36.9	42.3	46.0	48.8
	本 町		20.0	22.4	25.1	29.1	32.4	36.8	40.8	45.2	48.9
	溝 辺		19.5	22.4	25.0	27.5	32.3	34.6	39.9	46.1	48.5
	陵 南		20.5	22.7	24.7	30.0	32.5	34.4	41.7	44.3	49.2
	竹 子		20.0	22.1	25.6	29.7	32.3	41.5			

第6部 教育・文化・体育編

胸 囲 (昭和58年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		57.7	59.8	62.1	64.4	66.9	69.6	72.6	76.1	79.7
			57.3	59.0	61.6	63.7	65.8	68.7	70.7	75.0	78.7
			57.0	58.8	61.2	62.3	65.6	67.7	67.8	72.8	76.5
			56.8	58.2	61.2	61.5	65.0	66.3	66.8	74.4	77.3
			56.8	58.2	60.9	63.7	66.7	68.7	68.8	71.1	75.6
			57.4	60.0	61.1	61.8	65.0	68.0			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		56.3	58.3	60.6	63.2	66.3	70.2	74.3	77.2	79.3
			55.4	57.4	59.8	62.2	65.0	69.3	73.9	76.7	78.8
			55.4	57.2	59.2	62.9	65.8	69.3	73.3	76.9	78.6
			54.0	56.9	58.9	60.6	64.4	66.2	72.5	77.5	78.3
			55.5	57.3	58.1	63.5	65.3	67.7	74.1	76.2	78.9
			56.7	57.5	60.5	64.5	67.7	74.1			

座 高 (昭和58年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		65.1	67.6	70.0	72.2	74.3	76.7	79.9	83.5	86.8
			64.7	67.2	69.6	71.8	73.5	76.2	78.7	82.9	86.0
			64.5	66.1	68.9	70.6	73.0	75.9	79.1	82.5	87.0
			64.2	66.5	68.8	70.6	72.4	76.0	79.4	83.5	86.8
			64.5	66.1	68.8	70.9	74.4	76.6	78.7	81.4	87.1
			64.8	65.8	69.0	70.4	72.1	75.2			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		64.7	67.2	69.7	72.1	75.0	78.3	81.4	83.3	84.3
			64.2	66.7	69.3	71.5	74.5	78.2	81.2	83.0	83.9
			63.7	66.5	69.0	72.2	73.7	78.5	81.7	83.6	84.7
			62.7	66.2	68.9	70.2	74.2	77.7	81.1	83.3	84.8
			64.7	66.7	68.5	72.8	74.6	77.0	82.3	83.8	84.5
			63.6	66.5	69.7	73.5	72.4	80.7			

身長(昭和59年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 本 本 溝 陵 竹	国 本 町 辺 南 子	116.3	122.0	127.4	132.5	137.6	143.2	150.0	157.5	163.6
			115.3	120.9	126.2	131.4	136.4	141.7	148.5	155.9	162.4
			113.8	120.9	128.1	131.3	134.5	141.2	148.2	153.6	160.6
			112.6	121.6	125.6	130.1	134.7	139.4	146.6	154.8	162.2
			115.4	121.0	126.2	132.5	135.3	144.1	149.8	152.3	158.9
			113.5	120.2	132.4	131.2	133.6	140.2			
女	全 本 本 溝 陵 竹	国 本 町 辺 南 子	115.6	121.6	126.8	132.4	138.7	145.4	150.8	154.4	156.2
			114.7	120.3	125.8	131.4	137.6	144.1	149.8	153.5	155.5
			113.8	120.0	125.7	131.5	138.2	144.2	148.6	153.1	154.8
			114.7	118.2	125.6	131.6	137.3	144.2	149.8	152.3	154.4
			113.1	121.4	126.5	130.9	137.6	145.0	147.4	153.8	155.1
			113.7	120.3	125.0	131.9	139.8	143.3			

体重(昭和59年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 本 本 溝 陵 竹	国 本 町 辺 南 子	21.1	23.5	26.3	29.4	32.7	36.4	41.7	47.3	52.8
			20.7	23.1	25.7	28.6	31.7	35.1	40.0	45.6	51.3
			19.7	22.6	25.1	27.7	29.9	35.1	39.1	43.0	48.7
			19.3	23.4	25.1	27.8	29.6	33.3	37.9	43.0	51.1
			20.6	22.5	24.5	27.8	31.3	36.9	40.3	43.0	46.2
			19.1	21.8	25.6	27.6	28.7	35.1			
女	全 本 本 溝 陵 竹	国 本 町 辺 南 子	20.7	23.0	25.8	29.1	33.0	37.7	42.9	46.8	49.7
			20.3	22.6	25.3	28.3	32.2	36.9	41.9	46.3	49.3
			19.5	22.7	25.4	27.9	33.1	38.0	40.5	45.3	49.0
			20.0	21.6	24.9	27.7	31.6	36.7	41.7	45.4	49.9
			19.5	22.5	25.6	27.5	33.2	36.4	39.3	45.1	48.0
			19.1	23.9	25.7	28.5	34.5	40.8			

第6部 教育・文化・体育編

胸 囲 (昭和59年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国		57.7	59.9	62.1	64.5	67.0	69.5	72.7	76.2	79.7
	本 県		57.2	59.3	61.6	63.9	66.1	68.5	71.3	75.1	79.1
	本 町		56.6	59.0	60.9	63.5	65.1	68.8	69.1	72.0	76.5
	溝 辺		55.6	58.3	59.6	62.3	63.8	66.1	69.2	72.0	77.4
	陵 南		57.7	59.5	60.6	65.3	67.4	71.0	68.9	71.9	75.5
	竹 子		56.5	59.3	62.4	63.0	64.1	69.2			
女	全 国		56.3	58.3	60.6	63.3	66.5	70.3	74.6	77.4	79.6
	本 県		55.7	57.8	60.0	62.4	65.6	69.5	73.8	77.0	79.3
	本 町		55.5	58.1	60.2	62.1	66.7	70.6	72.8	76.4	79.8
	溝 辺		54.1	55.5	59.2	61.2	63.4	68.4	74.2	76.3	80.0
	陵 南		56.1	58.3	60.5	61.4	66.8	69.7	71.3	76.5	79.5
	竹 子		56.2	60.4	61.0	63.7	69.0	73.8			

座 高 (昭和59年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国		65.2	67.0	70.1	72.3	74.4	76.7	79.9	83.6	86.8
	本 県		64.7	67.1	69.6	71.8	73.9	76.1	79.2	82.1	86.8
	本 町		64.1	66.9	69.3	71.2	72.6	75.9	79.7	82.1	85.8
	溝 辺		64.3	67.2	69.7	70.8	72.9	75.5	79.2	83.0	87.0
	陵 南		64.2	66.1	69.1	71.1	72.1	76.6	80.2	81.2	84.5
	竹 子		63.7	67.3	69.0	71.7	72.7	75.6			
女	全 国		64.8	67.3	69.8	72.2	75.2	78.4	81.5	83.4	84.4
	本 県		64.2	66.7	69.3	71.8	74.7	78.0	81.2	83.1	84.3
	本 町		63.9	66.4	69.4	71.8	74.8	77.5	81.5	83.7	84.5
	溝 辺		64.6	65.6	69.5	71.9	74.0	77.6	82.3	84.0	84.9
	陵 南		63.7	66.2	69.7	70.8	74.0	77.8	80.6	83.4	84.0
	竹 子		63.5	67.3	69.0	72.6	76.5	77.2			

身長(昭和60年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		116.4	122.1	127.5	132.6	137.7	143.2	150.0	157.7	163.8
			115.4	121.1	126.5	131.6	136.7	141.9	148.3	156.2	162.4
			114.9	119.6	126.2	131.1	136.5	139.6	147.9	156.1	160.6
			114.6	118.5	126.9	131.3	135.1	139.6	145.6	154.6	162.6
			116.2	120.2	125.2	131.6	137.9	139.8	150.2	157.6	158.6
			113.8	120.0	126.5	130.4	136.5	139.3			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		115.7	121.4	126.9	132.6	138.8	145.5	150.9	154.4	156.3
			114.8	120.4	126.0	131.5	137.7	144.3	149.8	153.8	155.6
			113.9	119.9	126.5	131.5	137.7	144.3	150.4	152.6	155.8
			114.6	121.1	124.0	131.4	137.7	143.1	149.5	152.8	155.4
			114.9	118.6	127.5	132.7	137.5	144.1	151.3	152.4	156.1
			112.3	120.1	127.9	130.5	137.8	145.7			

体重(昭和60年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		21.2	23.7	26.5	29.5	32.8	36.5	41.8	47.4	53.0
			20.8	23.2	25.9	28.7	32.0	35.3	40.1	45.8	51.4
			20.8	22.3	25.4	27.6	31.4	33.0	39.6	45.7	49.0
			20.0	22.3	26.7	27.9	31.1	33.0	38.0	43.78	49.3
			21.7	22.9	25.1	27.0	32.8	33.7	41.2	47.7	48.6
			20.8	21.6	24.4	27.8	30.2	32.3			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子		20.7	23.2	26.0	29.2	33.1	37.8	42.9	46.8	49.8
			20.4	22.7	25.4	28.5	32.2	37.0	42.2	46.4	49.4
			19.7	22.0	26.0	28.3	32.0	37.4	42.4	44.9	49.3
			20.0	22.8	25.5	28.2	31.1	36.5	41.9	45.8	49.2
			19.9	22.0	25.0	29.3	31.9	37.3	42.8	44.0	49.3
			19.9	22.0	25.0	29.3	31.9	37.3	42.8	44.0	49.3

第6部 教育・文化・体育編

胸 囲 (昭和60年度)

性	学校名	小 学 校						中 学 校		
		6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国	57.8	59.9	62.2	64.6	67.1	69.6	72.8	76.2	79.9
	本 県	57.2	59.4	61.7	63.6	66.6	68.6	71.3	75.2	78.5
	本 町	57.8	58.4	61.0	62.8	66.0	67.2	69.6	72.9	75.8
	溝 辺	56.3	57.4	60.2	61.4	65.3	66.5	69.5	73.3	77.0
	陵 南	58.5	59.2	61.2	62.7	67.0	68.2	69.7	72.4	74.6
	竹 子	58.6	58.6	61.7	64.4	65.7	67.0			
女	全 国	56.4	58.5	60.8	63.4	66.6	70.4	74.7	77.5	79.7
	本 県	55.6	57.6	59.8	62.5	65.4	69.6	74.2	76.9	79.2
	本 町	55.6	57.2	60.1	62.2	65.0	69.5	73.5	76.5	79.5
	溝 辺	54.8	56.0	57.3	61.3	63.6	66.3	73.0	76.5	78.6
	陵 南	55.4	57.3	59.4	62.9	64.3	69.9	74.0	76.4	80.3
	竹 子	56.6	58.3	63.7	62.4	67.2	72.4			

座 高 (昭和60年度)

性	学校名	小 学 校						中 学 校		
		6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国	65.2	67.7	70.1	72.3	74.4	76.7	79.9	83.7	87.0
	本 県	65.0	67.6	70.0	71.8	74.1	76.4	79.3	83.1	86.2
	本 町	64.5	66.2	69.2	71.1	72.9	74.0	79.9	83.3	85.6
	溝 辺	64.5	65.7	69.2	70.9	71.6	74.0	78.8	82.7	86.6
	陵 南	62.5	67.0	68.5	71.2	73.2	73.4	81.0	83.8	84.6
	竹 子	63.8	66.0	69.8	71.3	73.9	74.7			
女	全 国	64.7	67.4	69.8	72.3	75.2	78.5	81.6	83.4	84.5
	本 県	64.5	67.0	69.5	72.3	75.0	78.3	81.2	83.2	84.3
	本 町	63.8	66.4	69.4	71.4	74.6	77.3	81.6	83.8	84.9
	溝 辺	64.2	66.4	68.5	70.6	74.4	76.4	81.1	84.2	84.5
	陵 南	64.0	66.3	69.3	72.1	74.1	76.5	82.1	83.3	85.3
	竹 子	63.1	66.4	70.3	71.4	75.2	79.0			

身長(昭和61年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 本 本 溝 辺 陵 竹	国 本 本 町 南 子	116.5	122.2	127.7	132.9	137.9	143.6	150.2	157.7	163.9
			115.5	121.2	126.8	131.5	136.6	142.2	148.9	156.5	162.8
			114.9	120.7	125.7	131.6	135.0	141.5	145.6	155.4	162.7
			113.5	120.1	124.3	131.8	135.2	140.0	144.9	153.3	160.9
			115.9	122.0	126.0	131.5	134.8	144.5	146.2	157.5	164.4
			115.4	119.9	126.9	131.5	134.9	140.1			
女	全 本 本 町 南 子	国 本 本 町 南 子	115.8	121.5	127.1	132.8	138.9	145.6	151.0	154.4	167.6
			115.3	120.6	126.3	132.4	138.3	145.1	150.5	153.9	155.8
			115.5	119.1	125.7	132.0	136.4	143.5	150.1	154.6	155.0
			114.5	118.8	127.3	130.0	137.7	141.8	150.2	153.5	154.8
			116.0	120.3	123.6	131.3	134.8	144.5	150.0	155.6	155.2
			116.1	118.1	126.1	134.6	136.6	144.3			

体重(昭和61年度)

性	学校名	年齢	小学校						中学校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 本 本 町 南 子	国 本 本 町 南 子	21.2	23.8	26.7	29.7	33.1	37.0	42.2	47.7	53.3
			20.7	23.1	26.1	28.5	32.0	35.6	40.4	46.5	52.2
			20.1	23.6	24.7	27.7	30.9	34.0	37.4	45.4	51.4
			19.8	22.8	24.3	29.0	30.7	33.4	36.4	43.6	50.3
			20.2	24.3	25.2	27.0	30.8	36.5	38.4	47.1	52.5
			20.3	23.7	24.5	27.1	31.2	32.1			
女	全 本 本 町 南 子	国 本 本 町 南 子	20.8	23.3	26.2	29.4	33.3	38.2	43.4	47.1	50.0
			20.6	22.7	25.5	28.5	32.5	37.3	42.6	46.5	49.8
			20.6	22.2	25.1	29.5	32.3	37.3	43.4	47.0	49.0
			20.0	22.6	25.9	27.7	32.0	36.3	42.4	46.0	49.0
			21.7	22.4	25.7	28.7	33.3	36.4	44.3	48.0	49.0
			20.2	21.6	23.6	32.2	31.5	39.1			

第6部 教育・文化・体育編

胸 囲 (昭和61年度)

性	学 校 名	年 齢	小 学 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	57.8	59.9	62.3	64.7	67.2	69.9	73.0	76.4	80.1
		本 県	57.3	59.4	61.6	63.9	66.3	68.9	71.7	75.3	79.0
		本 町	56.8	60.0	60.5	62.9	65.0	67.7	69.8	74.5	78.8
		溝 辺	55.8	58.8	60.2	62.4	64.5	66.6	68.3	72.5	76.9
		陵 南	56.8	60.0	60.0	62.8	64.5	69.2	71.3	76.5	80.7
		竹 子	57.7	61.2	61.2	63.6	66.0	67.2			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	56.4	58.5	60.9	63.6	66.7	70.7	75.0	77.7	79.8
		本 県	55.9	57.9	60.1	62.6	65.9	69.7	74.2	77.3	79.2
		本 町	54.7	57.4	59.2	63.5	65.2	69.5	74.3	76.3	77.5
		溝 辺	53.5	57.6	59.3	61.5	64.4	68.1	72.6	74.1	75.7
		陵 南	53.6	57.0	58.7	61.4	65.4	67.4	75.9	78.4	79.3
		竹 子	57.0	57.7	59.7	67.5	65.8	73.0			

座 高 (昭和61年度)

性	学 校 名	年 齢	小 校 校						中 学 校		
			6	7	8	9	10	11	12	13	14
男	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	65.3	67.8	70.2	72.4	74.6	77.0	80.1	83.7	87.1
		本 県	64.7	67.3	69.7	71.9	74.1	76.4	79.2	82.9	86.5
		本 町	64.5	66.9	68.7	71.1	73.1	75.9	76.5	83.4	87.2
		溝 辺	64.4	66.9	68.1	71.3	72.7	76.2	75.0	82.6	86.8
		陵 南	64.4	67.5	68.8	70.3	73.1	76.1	77.4	84.2	87.6
		竹 子	64.8	66.4	69.3	71.8	73.5	75.5			
女	全 国 本 県 本 町 溝 辺 陵 南 竹 子	全 国	64.8	67.4	69.9	72.4	75.2	78.6	81.7	83.5	84.5
		本 県	64.4	67.0	69.5	72.0	75.0	78.2	81.2	83.2	84.3
		本 町	64.0	66.4	68.9	71.6	74.8	77.8	81.9	83.6	84.6
		溝 辺	62.6	67.2	69.2	70.9	74.4	76.9	81.9	83.2	84.6
		陵 南	64.5	66.6	68.5	71.0	75.1	78.1	81.8	84.0	84.6
		竹 子	64.9	65.4	68.9	72.8	74.8	78.5			

八 給食センター

学校給食が、児童生徒の体位向上に果たした役割は計り知れないほど大きい。

当初は各学校ごとに独自の自校給食を実施していたが、栄養格差の解消、経費の節減及び効率的な運用を図る必要から「より豊かな学校給食」をめざして、給食センターを建設することとなった。

昭和三十九年十一月、旧溝辺小学校校庭の一隅にセンター建設に着工（総工費六六一万円、什器備品を含む）、翌年二月完成、三月一日からA型五日制の完全給食を開始した。しかし栄養・効率の面から、また施設が老朽化・旧型化したうえ狭くなったため、対処できなくなり、新築整備することになった。

新センターは、有川字石塚（現在の溝辺小学校所在地）に建設されることとなり、五十二年に着工された。

内容は、面積三〇八・四平方メートル、総工費三六三万七三〇〇〇円で同年十一月から業務を開始した。なお五十九年九月六日、学校給食調理場運営に優れた成果を挙げたこ

第144表 給食人員の推移

年 度	人 員 数	年 度	人 員 数
40	1,874	51	1,090
41	1,897	52	1,061
42	1,667	53	1,027
43	1,560	54	1,012
44	1,455	55	991
45	1,388	56	1,021
46	1,315	57	1,048
47	1,255	58	1,062
48	1,228	59	1,111
49	1,171	60	1,197
50	1,127	61	1,219

とにより、文部大臣表彰の栄に浴した。
給食人員、給食費の推移は第144・145表のとおりである。

第145表 給食費の推移

(単位：円)

年 度	小 学 校	中 学 校	幼 稚 園
40	500	600	—
41	550	650	—
42	700	800	—
43	700	800	—
44	800	950	—
45	800	950	—
46	800	950	—
47	1,100	1,200	1,150
48	1,100	1,200	1,150
49	1,100	1,200	1,150
50	2,000	2,300	1,800
51	2,000	2,300	1,800
52	2,300	2,700	2,000
53	2,400	2,800	2,200
54	2,500	2,900	2,300
55	2,800	3,100	2,500
56	2,800	3,100	2,500
57	2,800	3,100	2,500
58	2,900	3,200	2,500
59	3,200	3,600	2,700
60	3,200	3,600	2,700
61	3,200	3,600	2,700

第二章 社会教育

一 社会教育委員会

最近特に重視されてきている社会教育について、国及び地方公共団体は、社会教育の奨励に必要な施設の設置運営、集会の開催、資料作成など、町民があらゆる場所を利用して、自ら実際活動に即する文化的教養を高める環境作りに努めるよう、社会教育法で定められている。

その他、社会教育の推進の中心となる社会教育委員及び専門職員の設置や、町との関係、社会教育関係団体との関係について重要な役割をもっている。

溝辺町は、昭和二十八年条例によって社会教育委員が設置されている。委員は、

① 本町の区域内に設置された各学校長

② 各社会教育団体において選挙その他の方法により推

薦された団体の代表者

③ 学識経験者

を教育委員会が委嘱し、任期は二年である。本町における社会教育委員は、

① 社会教育に関する諸計画を立案すること。

② 定時または臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じこれに対して意見を述べること。

③ そのほか、その職務を行うため必要な調査研究を行うこと。

などである。

社会教育委員設置以来の委員は次のとおり（昭和三十九年以降分）。

39年 戸高友次、森武英、郷田良夫、笛田清則、有村

正道、村田久夫、加来貞信、海江田弘、上原正大、

鳥丸フヂ。

40年 森武英、郷田良夫、笛田清則、有村正道、村田

久夫、加来貞信、蔵園哲二、皆川圭助、鈴木健、最

勝寺良直。

41年 最勝寺良直、森武英、柚木正九、三好勇、村田

久夫、皆川圭助、鳥丸フヂ、今別府元、有村秀忠、

末重忠男。

42年 最勝寺良直、森武英、柚木正九、三好勇、村田

久夫、皆川圭助、鳥丸フヂ、今別府元、有村秀忠、末重忠男。

43年 最勝寺良直、今別府元、永井準、上門三郎、柚木正九、三好勇、藏園哲二、満塩郁夫、鳥丸フヂ、有村秀忠。

44年 最勝寺良直、今別府元、永井準、上門三郎、柚木正九、三好勇、藏園哲二、満塩郁夫、鳥丸フヂ、高田正行。

45年 今別府良春、永井準、赤塚真敦、須賀立雄、福德益盛、満塩時政、岩元華江、最勝寺良直、藏園哲二、延時力藏。

46年 今別府良春、赤塚真敦、福德益盛、岩元華江、最勝寺良直、藏園哲二、須賀立雄、久保田志朗、前田義一、黒木公博。

47年 今別府良春、前田義一、野間智、満塩春加、中馬隼人、米丸実行、向井田雅成、最勝寺良直、須賀スギ。

48年 今別府良春、肥田博、野間口タマ子、丸山幸男、野間勝實、末重久秋、向井田雅成、最勝寺良直、鳥丸フヂ。

49年 今別府良春、瀬戸口信海、武田二夫、丸山幸男、野間口タマ子、向井田雅成、松山淳一郎、今吉進、最勝寺良直、鳥丸フヂ。

50年 瀬戸口信海、武田二夫、野間口タマ子、今吉進、向井田雅成、松山淳一郎、鳥丸フヂ、海江田勇藏、野村定美、村田二夫。

51年 海江田勇藏、瀬戸口信海、笛田武則、向井田雅成、中山誠、今村日出子、今吉耕夫、満塩郁夫、最勝寺良直、鳥丸フヂ。

52年 海江田勇藏、鋤崎京平、向井田雅成、丸山重記、野間トキ子、山下勝義、春田時夫、最勝寺良直、鳥丸フヂ、笛田武則。

53年 海江田勇藏、鋤崎京平、笛田武則、向井田雅成、丸山重記、野間トキ子、松山浩、春田時夫、最勝寺良直、鳥丸フヂ。

54年 長井彰一、鋤崎京平、笛田武則、向井田雅成、白浜紀久男、野間トキ子、玉利敏也、八木鉄矢、最勝寺良直、今村日出子。

55年 坊地勝、鈴木平一、長井彰一、八木鉄矢、向井田雅成、町田英司、今村日出子、佐藤山人、岩元華

江。

56年 向井田雅成、町田英司、今村日出子、佐藤山人、岩元華江、満塩郁夫、坊地勝、鈴木平一、長井彰一。

57年 向井田雅成、長井彰一、福沢求生、土屋武彦、神田橋景光、宗像久子、笹峯護、二見剛史、岩元華江、満塩郁夫。

58年 向井田雅成、中島清隆、福沢求生、土屋武彦、神田橋景光、宗像久子、笹峯護、二見剛史、岩元華江、満塩郁夫。

59年 中島清隆、土屋武彦、福沢求生、宗像健、重森ヒロ子、岩元保雄、満塩郁夫、東繁、野間勝實。

60年 中島清隆、土屋武彦、荒田耕、今吉康己、古川ツル子、岩元保雄、満塩郁夫、東繁、岩元秀則。

61年 辻三郎、荒田耕、海江田幸雄、中久保稔、塩入薫、丸山忍、岩元保雄、岩元秀則、東繁、古川ツル子。

62年 辻三郎、荒田耕、海江田幸雄、森田二男、塩入薫、丸山忍、岩元保雄、東繁、上原正大、古川ツル子。

63年 今森通夫、兼廣晨史、北之園緑、笹峯純隆、岩元保雄、二見剛史、山村シゲ、上原正大、岩元喜吉、塩入薫。

二 公民館読書活動

学校教育はもちろんのこと、一般社会人としても、読書を通じて知識を高め、人間形成の充実に努めることの必要性は言をまたない。町内に一軒の書店もなく、書籍の購入に不便で、ややもすれば良書に接する機会の少ない本町にあっては、公民館図書室を利用する読書運動を推進することは、社会教育活動の中でも、重要な要素の一つである。

現在本町公民館図書室の蔵書は一万六二一冊で、町民一人当たり一・三冊である。その内容は哲学、歴史、科学、文学、趣味等々、きわめて広範囲にわたっている。

利用者の利便をはかるため、町内一〇カ所に配本所を設け、定期的に配本入れ替えを行い、広く町民に利用されている。年間貸出冊数は三三三二冊であり、開館一日平均一〇冊である。

また、町図書以外に「ともしび文庫」と「松山文庫」

があり、町図書と同様に管理され町民の利用に供されている。「ともしび文庫」は、新生活運動の一環として、

主に婦人会が推進している慶弔時における物品のお返しを廃止し、社会に役立てようという趣旨の「お返し廃止運動」による寄付金を原資としたものと、個人の蔵書を現物寄付されたものである。その冊数はおおむね一〇〇〇冊に達している。「松山文庫」は、昭和五十一年十一月名誉町民となった松山績氏が、町から支給の功労年金のほか、数回にわたる寄付金を原資とし、氏の意志に沿って設けたものである。その冊数はおおむね三五〇冊である。

ちなみに、本町関係者が出版した書籍の主なものを紹介すると、次のようなものがある。

『青雨』

岩元 深（喜吉）（有川）

著者の真珠婚を記念して出版した句集。俳句三二〇

余句のほか、随筆などを収録。一四〇ページ。

『ふるさとみぞべ』

松山 績（三編）

ふるさとをこよなく愛してやまない著者が、町内各地域にわたって、移りゆく溝辺の今昔をとらえた

書。一五四ページ。

『他火』

玉利狂花（卓也）（有川）

俳句歴三五五年の結晶。珠玉の三〇〇句余を収めた句集。二〇〇ページ。

『二見サト卒寿記念誌』

二見サト（有川）

九十有余年の幸せに満ちた著者の面影がしのばれる。一〇首の短歌や読書感想文などを収録。一二〇ページ。

『わがふるさと溝辺の神々』

岩元 恒（麓）

七十余年にわたって神職にあった著者が、町内各神社、山陵などについて、その由緒、歴史を記述した書。一〇八ページ。

『はい、親子読書の話です』

榎園高雄（町教育長）

『読書の町づくりはいきの長いしごと』

永年教職にあった著者が、親子読書について蘊奥^{うんおう}をきわめた著書。前者が二七七ページ。後者は三〇六

ページ。ほかに『読書十話』『鹿兒島県の民話』『親子読書の火は燃える』の著書がある。

『松山績先生米寿祝賀誌』

『松山績先生米寿祝賀誌』

発起人代表 野村秀男

大正三年以来教職にあること三十数年のうち溝辺小

学校に在職すること二十四年、昭和二十七年から二十四年間、町教育委員長として、その生涯を教育に尽くし、昭和五十一年十一月名誉町民となった松山績先生の米寿祝賀誌。幅広い年齢層の教え子たちの思い出やお祝の言葉を収録。三二五ページ。

三 県PTA活動研究公開

昭和五十七年十一月二十日、溝辺小学校並びに溝辺中学校を会場に「児童、生徒の健全育成をはかるためにPTAはどのように活動したらよいか」を研究主題に、県PTA活動研究公開が開催された。この研究公開を名実ともに成功させ、青少年育成の町溝辺町にふさわしい成果をあげるため、研究推進委員会を設置し、約一年間の準備期間のなか、研究討議がなされ、テーマにもとづき発表が行われた。研究推進委員会の組織は次ページの表のとおりである。

研究公開は、溝辺町各小中学校の特色あるテーマで分科会ごとに研究発表が行われた。テーマ及び発表者は下のとおりである。

分科会名	主 題 (研究テーマ)	問題提起者	司会者	記録者	指導助言者
1 (溝辺小1年)	望ましい親子読書をすすめるにはどうしたらよいか。	有馬 恒久 鶴岡 佑子	今吉 近見	長野 絹代 林 睦子	県立図書館 指導主事
2 (溝辺小2～4年)	花と緑の学校と地域を支えるためのPTA活動はどうななければならないか。	松山 節子	隈元 仁志	福永ヒロ子	指導主事 榎添 利光
3 (陵南小学校)	山坂達者運動をすすめるのにPTAはどう取りくんだらよいか。	野村 恵	有村 秀忠	末元 玉恵	指導主事 国ノ十 彬
4 (竹子小地域)	子どもの健全育成のために親と教師はどのように取りくんだらよいか。	岩元 節夫	蔵園 輝美	中吉ヨツ子 池田 律子	指導主事 斉藤 哲郎
5 (溝辺中3年)	中学生をもつ親として健全な子どもを育てるためのPTA活動はどのようにすすめたらよいか。	沼口 博美	重丸 淳一	重森ヒロ子 藤沢 律子	指導課長 石神 正明
6 (陵中1～3年)		黒岩 忠	笹峯 護	谷口 律子	指導主事 塩田 純夫

青少年育成
町民協議会
校外生活指導
連絡協議会
町校連・育成者協議会

会 長	神田橋景光
副会長	有村 四郎 土屋 武彦

町教育委員会
教 育 長
社会教育課長

町P連事務局
書記 荻田三郎
会計 内村 功

単 P	研究推進委員会	
	総 務 部	資 料 部
溝 辺 小	神田橋景光 (会 長)	木場 幸一 (副 会 長) 二見 朱実 (副 会 長) 隈元 仁志 (文化部長) 荻田 三郎 (教 頭)
陵 南 小	山下 勝義 (会 長) 福沢 求生 (校 長)	野村 恵 (副 会 長) 末元 玉恵 (副 会 長) 有村 秀忠 (部 長) 谷口 先雄 (教 頭)
竹 子 小	藤沢 征人 (会 長) 鈴木 平一 (校 長)	藏園 輝美 (副 会 長) 中吉ヨツ子 (副 会 長) 岩元 節夫 (部 長) 春田 帝 (教 頭)
溝 辺 中	有村 四郎 (会 長) 長井 彰一 (校 長)	宗像 健 (副 会 長) 松山喜久子 (副 会 長) 重丸 淳一 (部 長) 池田 一彦 (教 頭)
陵 南 中	今吉 康己 (会 長) 竹ノ内哲郎 (校 長)	笹峯 護 (副 会 長) 谷口 律子 (副 会 長) 外山 正士 (部 長) 吉永 健一 (教 頭)

各単 P 事務局
溝小 松山 寿
陵小 谷口先雄
竹小 川畑 彰
溝中 安藤敏哉
陵中 今村岑生

四 溝辺町の婦人活動

(一) 婦人会及び婦人の教育

初版では昭和四十七年まで記録されているので、四十八年から記述する。

婦人会活動も現代の高度経済成長のあおりを受けて、物質万能の思潮の中で、会員の減少をきたし、その運営もますます困難の度を加えていった。そうした中から、婦人の知性と社会の連帯感を深め、心豊かな婦人集団のあり方を目標に、努力を重ねてきた。

すなわち、部落婦人会の活発化と、各校区婦人会の連繫、町婦人会の組織の強化、弱齡化する婦人集団の引き締めなど、あらゆる困難を克服しながら、営々として涙ぐましい努力を続けてきた。しかし時代の趨勢はいかんともしがたく、五十年代後半から婦人会員の年齢の問題、役員の問題、職域の複雑化、社会機構の近代化など婦人集団の運営について容易ならざる事態が訪れた。五十六年に町連合婦人会及び陵南校区婦人会の欠落を見、さらに五十九年には伝統の溝辺校区婦人会も欠けるに及

んで、いよいよ婦人会活動は衰退の一路をたどり、わずかに校区婦人会では、竹子校区婦人会のみが残り、部落婦人会も、若妻を主体とする婦人活動が細々と残存する現状となった。その中で竹子校区婦人会は、さすがに伝統の強さを誇り、今でも会員八五名を有する婦人集団活動を展開している。なお各所に残る若妻集団は組織としての連携こそ失ったかに見えながら、各集落の婦人の中核として、現在でも婦人教育の一端を担っている。

一方五十八年四月、本町に自治公民館制度が発足するや、崩壊しつつあった婦人活動にその復活の兆しが見えはじめ、また行政の側からもそれらへの援助の手がさしのべられるようになり、現在、自治公民館婦人部として発足している地域が二一に及んでいる。もとより、その活動は千差万別で、それぞれの地域で、格差のあることは否めないが、それでも自らの地域性に根ざした自主婦人活動であることは喜びにたえない。同じ地域に住む婦人が地域での親交や連帯を深めながら、婦人としての生活や文化向上を図るとともに、より豊かな地域を建設するための役割は変わりなく、大きく社会に明るい展望を与えている。今後、徐々にこの機運が高まり地域ぐるみで

連携がとりやすいというメリットを生かしつつ婦人個々の自覚の中から近代的な知性と教養を高め、明るい郷土づくりの母体として地域集団も、目的集団も、一体となつて町発展のために邁進してゆくことが期待される。

昭和三十九年からの婦人会の歩みは次のとおり。

- 39・4 溝辺町婦人会活動目標決定Ⅱ婦人として教養を高め明るい郷土づくりに参加する。

〔努力点〕

- ① グループ学習をすすめ、婦人学級には全員参加しましょう。

- ② 生活を合理化するために記帳する習慣をつけよう。

- ③ 次代を担う子供の成長のために、みんなで力を合わせましょう。

39・5 婦人会便り発行

〔目的〕 役員と会員、また会員相互の結びつきを深め、手に手をとり合つて婦人会の目標を達成することに努め、郷土の発展のために微力をつくす目的のもとに婦人便りを発行する。

〔内容〕 会員の思うこと、詩・俳句・歌などなんでもよい。

40・7

町中央公民館建設Ⅱ町全体の社会教育の場として、念願の婦人会や各種団体の要望がかなえられ、勉強に集會に活用することが、婦人会の喜びでありまた町発展のためにつながるよう努力し、有益に活用したい。

41・4

中央公民館へピアノ一基寄贈Ⅱ会員一人一〇〇円寄付し不足分は基本貯金（年一回廃品回収益金・物品販売の益金など）をあてる。

41・10

明治一〇〇年記念成人式Ⅱ成人式の女子服装の簡素化について話し合い婦人会・社会教育委員などと問題検討したが、結局意見もまちまちで当事者が自覚を持つことということで、課題を持ち越す。

42・4

明治一〇〇年記念三ない運動の展開Ⅱ「ちらさない」「よごさない」「こわさない」

八・八運動 公民館、墓地その他清掃

県日赤募金会感謝状授与

42・8

町婦人会歌募集Ⅱ応募者は町内の人なら誰

42・10

でもよい、平易で親しみやすい歌詞四節三番
ぐらいが適當だと思うが、特別に規定はしな
い。

町婦人会歌制定

作詞 岩元 潔（社会教育主事 岩元喜吉）

作曲 郡山 三郎（玉利中教諭）

溝辺町婦人会歌

一 神います 高屋のふもと

受けつぎし 慈愛の光

とこしえに 代々に伝えむ

あゝ みぞべ

溝辺町 婦人のつどい

二 むらさきに けふる山なみ

母という おみなを幸を

清らけく 胸にたたえむ

あゝ みぞべ

溝辺町 婦人のつどい

三 みどり風 渡る高原

うち鳴らす 建設のうた

溝 辺 町 婦 人 会 歌

作詞 岩元 潔
作曲 郡山 三郎

1. か み い ま す た か や の ふ も と
う け つ ギ ー し じ あ い の ひ か り
と こ し え に よ よ に つ た え む あ ゝ み ぞ べ み ぞ
べ ち ょ う ふ じ ん の つ ど い ん の つ ど い

高らかに 力合わせむ
あゝ みぞべ

溝辺町 婦人のつどい

43・4

馬立校区・玉利校区が合併、陵南校区と改称

45・12

溝辺町内婦人合同大会Ⅱ紅葉会、高陵寺仏教

婦人会、照明寺仏教婦人会、ときわ会、溝辺

町婦人会など各種団体による意見発表や、激

しく変わる社会についての意見交換会

46・5

「太陽国体」集団婦人演技への参加決定Ⅱ昭

和四十七年に鹿児島県で国民体育大会が開催

されるにあたり、町から次の一〇名が出場と

決まり、一年間特訓を受ける。

今村日出子、松元すみえ、野間トキ子、横

山節子、上田橋治子、満塩清子、徳永とみ

え、中馬トシ子、西野ナミエ、野間口タマ

子

46・9

県体育大会集団演技参加

47・4

本町も経済高度成長や新空港開設などにより

婦人会の姿が大きく変容して会員も年々農外

就労婦人が多くなり、会員の減少がみられ

る。

47・10

「太陽国体」炬火リレーⅡ校区から八名、計

二四名

48・4

「太陽国体」集団演技出場（半世紀に一度と

もいふべき歴史的な大会であった）

愛の声かけ運動Ⅱねたきり老人、独居老人、

青少年
新生活運動の推進
お返し廃止運動カード作成

49・4

文部省委嘱婦人学級開設

町婦人会活動目標決定Ⅱ近代的知識と社会的

連帯感を深め、意義ある生活のできる豊かな

主婦になりましょう。

〔努力点〕

① 部落婦人会の組織を拡充し学習活動をするめよう。

② 他団体との連携をはかり、豊かで生きが

いのある郷土の建設をめざして私たち町民

はさらに意欲と連帯感を高め、明るくたく

ましく美しい郷土の実現をはかる。

〔会費〕 県一〇円、郡二〇円、町一七〇円、

校区三〇〇円

49・12

町内各種婦人団体懇話会Ⅱ町内婦人団体長に

よる各団体の目標や努力点など話し合い、お互いに理解を深め、手を取り合って明るい町づくりに努めようと話し合う。

50・4 国際婦人年Ⅱ平等、発表、平和の目標のもとに婦人活動の充実と婦人の社会参加をはかる。

51・4 おむつ一枚運動Ⅱねたきり老人の施設へおくる。

52・4 部落婦人会の組織の拡充Ⅱ会員の急激な減少により年齢の引き上げを呼びかける。

53・12 青少年の健全育成と環境の浄化Ⅱ愛の声かけ運動

町内各種婦人団体による合同大会Ⅱお互いの親善と生活合理化のため不要品の交換即売会を行い、生活改善向上の必要性を認識する。
 益金は「年末たすけ合い運動」へ寄付。

54・3 婦人会の役員と会員減少問題Ⅱ町、校区の役員と会員の部落ごと脱退など年々困難を極め、地域婦人会に崩壊の兆しあり。婦人会の存在について深刻な課題となる。

54・9 婦人会老人会対抗「幸せづくり」交換ゲートボール大会

56・4 昭和二十七年に溝辺町婦人会が結成以来、町婦人会、陵南校区の役員体制が確立されず活動が停滞してしまふ。溝辺校区、竹子校区については役員体制を整え、事業内容なども検討を加え、一応の活動充実される。

56・8 陵南校区婦人問題について、町議員、大字役員、PTA役員が地域婦人会の存続とこれからの対策について協議。

57・6 婦人組織の拡充をはかるⅡ入会年齢を五〇歳までとする。

○歴代会長と会員数

町連合婦人会		溝辺校区婦人会		陵南校区婦人会		竹子校区婦人会	
会長	会員	会長	会員	会長	会員	会長	会員

昭四八	五二七	野間口タマ子	二六三	花堂 時子	一五七	藤山 律子	一〇七	蔵園 ッタ子
四九	五〇四	野間口タマ子	二四七	上原 タマ	一五七	有村 マサ子	九六	最勝寺 幸子
五〇	四五二	野間口タマ子	二一〇	今吉 スミ子	一四六	大野 久子	九六	外山 文子
五一	四二五	今村 日出子	一八八	松元 スミエ	一四三	末重 トモ子	九四	竹下 文江
五二	三九五	野間 トキ子	一八五	大人 文子	一四〇	住吉 絹子	八八	田村 道子
五三	三八五	野間 トキ子	一八〇	川床 友子	一三七	有村 ハツ子	七八	別府 安子
五四	三六九	今村 日出子	一八〇	川床 友子	一一一	末元 玉恵	七八	内ノ段ハギ子
五五	三〇〇	今村 日出子	一三九	花堂 和子	一〇三	福永 イツ子	八〇	岩切 裕子
五六			一一七	重森 勝代			八〇	宗像 久子
五七			八〇	森田 美代子			八五	岩切 桂子
五八			八〇	森田 美代子			八五	岩切 アツ子
五九							八六	岩切 悦子
六〇							八八	池田 律子
六一							八五	二月田久美子

(一) 白菊会

昭和五十年発足した。会員は町内に居住する五〇歳以上の婦人で構成され、婦人相互の親交と融和をはかり新しい住みよい地域社会をつくることを目的に、互いに連帯を深め、共に親交・学習・奉仕・課題解決を図って地域での活動を通じて、自己を磨き明るいより豊かな社会建設に貢献されている。また生活学校や毎月一回の老人ホーム訪問のボランティア活動など、その果たしてきた役割と実績は大きなものがある。そして婦人の立場からの地域づくりは、今後の社会に明るい展望を与えている。

○歴代会長

鳥丸フヂ	昭50	岩元里江	55
	52		57
重森ふじ	53	松山絹江	57
	54		現在

(二) 竹子「紅葉会」

昭和三十一年九月^{しゅうとめ}姑会として発足した。この会は婦人会を退会した婦人でこの会の趣旨・目的に賛同する竹子在住者で組織され、嫁と姑の協調・理解を深め、新しい時代の教養を高め、明るい家庭と地域社会の建設に寄

与するとともに、相互の連帯を深めることを目的とする。地区の諸行事には校区婦人会、共正会などと一体となり、敬老会、七草祝いや年末年始の簡素化など、婦人の立場から地域に明るい展望を与えてきた。また年一回の会員の研修旅行は、会員交流の場として融和と親交をはかる唯一の楽しみである。

○歴代会長

最勝寺アイ	昭31	神田橋チエノ	48
	39		55
田方アヤノ	40	下久保アサノ	56
	47		現在

(四) 麓「常磐会」

昭和三十六年、竹子「紅葉会」とほとんど同じような組織として麓地区で発足、幾多の消長を経ながら、今日に及んでいる。婦人集団として残した実績は大きく、評価されるべきものであり、今後の自主的な婦人活動の原点ともなるべきものである。

会長 鳥丸敏子

(五) 溝辺町結核予防婦人会

41・3 溝辺町結核予防婦人会結成

- 〔目的〕 婦人の力で結核をなくして、健康な生活を営み明るい町づくりをすすめる、結核に対する予防思想の普及をはかる。
- 〔努力点〕
- ① 結核検診（レントゲン撮影）などの強化推進
 - ② 結核に対する認識を深める学習会〔会員〕 町婦人会員の組織で結核予防婦人会とする。運営は町三役、各校区役員が行う。
- 県結核予防会感謝状授与（レントゲン検診率九六割） Ⅱ 婦人会員の熱心な呼びかけと、町民の検診に対する自覚と協力によって県の感謝状を受ける。
- 全国結核予防婦人団体研修会参加（県代表として溝辺町が参加） Ⅱ 静岡県御殿場市の秩父宮妃殿下ご別邸に参集
- 財団法人結核予防会総裁秩父宮妃勢津子殿下より感謝状を受ける。
- 昭和五十八年後期から地域婦人会の活動が不能のため、現在町食生活推進員で活動が引き

継がれ、成果を上げている。

五 青年団連絡協議会

溝辺町青年団連絡協議会は、昭和四十七年改組され、現在にいたっているが、溝辺町は昭和二十六年九一二十四人の人口を最高に年々人口減がすすみ、昭和四十七年当時は六九四二人で、これに比例し青年団員数も減少して



青年団員の話し合い

きた。このような中で青年団活動は、伝統による活動、その時代に合った催しなど、実践活動が行われてきている。町青協を推進してきた役員及び主な活動は第146表のとおりである。

第146表 主な活動状況

年	会長	副会長	団員数	主	な	活	動	内	容
48	丸山 幸男	野村 定美、最勝寺宏子							
49	森田 重三	野村 定美、精松 光子							○町内一周駅伝（昭和56年まで実施）
50	野村 定美	中山 誠、最勝寺宏子							○第1回歩け歩け大会（鹿児島市照国神社から） ○国内研修（熊本市9人） ○九州青年の船
51	中山 誠	笹峯 勉、末重タキ子							○第2回歩け歩け大会 ○国内研修（宮崎・大分 10人） ○九州青年の船（野村定美）
52	丸山 重記	今吉 睦美、野間口 恵							○第3回歩け歩け大会 ○国内研修（熊本・長崎）
53	白浜紀久男	西野 勝美							○第4回歩け歩け大会 ○第1回町青年祭 ○九州青年の船（西野勝美）
54	町田 英司	岩沢 豊、福丸久美子	70						○第5回歩け歩け大会 ○第2回青年祭
55	二月田 努	岩元 博昭、野間いづみ							○第6回歩け歩け大会 ○第3回青年祭 ○第1回少年の船（班長・馬場勝芳） ○第7回歩け歩け大会 ○第4回町青年祭 ○九州青年の船（藏園成美） ○第2回少年の船（班長・国生ひとみ）
56	花堂 誠	有村 友志、国生ひとみ							○第8回歩け歩け大会 ○第3回少年の船
57	藏園 成美	有村 友志、重丸 智秋							
58	相良 悟	有村 辰巳、中山 幾代	68						○第9回歩け歩け大会 ○秋田県雄和町青年団と交流会 ○県内研修（指宿） ○九州青年の船（内山建志） ○第4回少年の船（班長・松田淳一）
59	内山 建志	岩崎 博樹、白浜まゆみ	60						○第10回歩け歩け大会（岩元実幸） ○第5回青年祭 ○国内研修 ○九州青年の船
60	原口 順一	斉藤 修、重丸 智子							○第11回歩け歩け大会 ○第6回青年祭 ○若人のつばさ（ソノガポール） （原口順一） ○国内研修（沖縄4人） ○九州青年の船（住吉智） ○第6回少年の船（班長・大山美佐子）
61	斉藤 修	立田 守、竹下留美子	43						○第12回歩け歩け大会 ○第7回青年祭 ○国内研修（奈良4人） ○九州青年の船（藤崎勝清） ○第7回少年の船
62	松田 淳一	福永 洋一、原口 美和	37						○第13回歩け歩け大会 ○第8回青年祭（ミューズカル「サ結婚」公演） ○国内研修（長崎4人） ○九州青年の船（重丸智子） ○第8回少年の船（班長・仮屋園 修）

注 役員は会計年度、活動は暦年

六 青少年の家の建設

鹿児島は昔から郷中教育がさかんで、青少年の教育に特殊な教育方法が行われていた。郷中の青少年は、五〜六歳から九歳ぐらいまでを「小稚子」、一〇歳から一二〜三歳までの「長稚子」、元服して前髪をおろした一三〜一四歳から二三〜四歳ぐらいを「二才」といい、それに二才頭がいて後輩たちの指導をしてきた。この「二才」が現在の青年たちである。青年たちの自己研鑽の場として青年小屋があり、活達な議論や活動が行われていたようである。

しかし、世の変革とともに青年小屋はなくなった。いま青少年教育として青年小屋の教育の発想から、青年が自ら啓発し、情操豊かで、心身ともにすこやかに育つため、また話し合いの場、教育の場、遊びの場として、日常活動の拠点として活用する館が「青少年の家」である。

昭和五十四年度に建設された青少年の家は、青年の利用が多いが、子供会活動の場としても活用されている。

今後、むらおこしの中心として、また若人の情熱とエネルギーを期待するところである。

〔施設の概要〕

所在地 溝辺町麓三三九一番地上床公園内
面積 鉄筋コンクリート平屋建（一〇三・六三平方

方）

施設 玄関、学習室、湯沸室、物入、便所
事業費 本体工事 一〇三五万円

敷地造成 一三六万円

水道施設 一一万六〇〇〇円

設計監理 三〇万円

（財源内訳）

県補助金	四三九万二〇〇〇円
地方債	五六〇万円
一般	二二三万四〇〇〇円
合計	一二一二万六〇〇〇円

七 竹子青少年会館の建設

竹子青少年会館は、地域ぐるみ青少年の気風づくりを

すすめるための拠点施設として、竹子青年団が中心に計画し、県及び町の補助をうけて、昭和五十八年三月十日建設された。竹子地区は昔から「たかぜ」に根づいている。「山には木を、里には人を」の精神をよく引き継ぎ、青少年の育成には地域ぐるみの活動が盛んなところである。特に、青年団はその中心的役割を担っている。当時竹子青年団は団員三〇名であった。その活動の中心地として、消防団竹子分団詰所を借りうけていたが、町営住宅計牛団地の建設にともない、現在地に町が土地取得造成し、館の建設に至った。

建設にあたって青年団は竹子青少年会館建設委員会を設置、委員長に団長の相良悟が当たり、工事は青年団OBの丸山幸夫の手により完成した。棟上げでは、男子はその作業に、女子は祝用の紅白の餅^{もち}をついて、手料理で祝った。その団結と行動力は、青少年の自立自興の精神に基づいたものであり、今後大いに期待されるところである。

〔竹子青少年会館建設委員会委員〕

▽委員長 相良悟 ▽副委員長 西野勝美 ▽書記

丸山みどり ▽会計 祝儀園信代 ▽委員 二月

田努 外山忠、蔵園成美、斉藤修、野村定美（社会教育主事）

〔施設の概要〕

所在地 溝辺町竹子六〇九番地四

敷地 一〇八〇平方畧

建物 木造平屋 一六・六六平方畧

事業費 七一五万円（町補助金四〇〇万円、県補助

金三〇〇万円、自己資金一五万円）

町の総事業費

土地取得費 三三七万九九〇〇円

造成費 九四万円

補助金 七〇〇万円

（建設費、設計、備品その他）

計 一一三一万九九〇〇円

八 高校生父母の会の発足

溝辺町高校生父母の会は高校生をもつ父母（保護者）が主体となって組織され、家庭における健全化をはかる活動、社会環境の浄化をはかる活動、高校生がその誇り

と責任について自覚を高めるための活動を通じて、健全な育成を目的に昭和五十四年発足した（初代会長・延時力蔵）。生徒の夏休みを利用した活動は、高校生を中心としたものが望ましいことであったが、高校が分散していたため町内高校生が一堂に会する行事はむずかしく、苦難の出発であった。しかしスポーツを中心に取り組み、青少年育成講演会、青年祭への参加、サマーキャンプによる共同生活の体験学習の実施など、その目的を徐々に達成しつつある。

発足当時の組織は、町内を九つの地域に分割し、それぞれ役員を選出。一方各高校からも代表を選出し、この会の企画運営に当たってきた。五十八年自治公民館制度の発足により、本会の組織も六地区公民館とし、その活動は地区常任理事が中心となって、地区活動が主体となった。また、青少年健全育成事業のひとつとして、次のように「青少年ふるさと講演会」を実施するようになった。

50年 「勝利者への道」 加治佐正昭氏（鹿商工レスリング部監督）

60年 「剣道に学ぶ」 末野栄二氏（鹿児島県警）

「想いで甲子園」松下安男君（鹿商工野球部主将）

61年 「青年期における心の健康法」古江マチ子氏（医師）

62年 「企業が求める若人の姿」山元正博氏（錦灘酒造専務）

九 青少年育成町民会議の発足

昭和五十四年は「国際児童年」として、世界の青少年の育成を目的に国際連合で定められた。溝辺町でも特色ある育成活動のひとつとして、先駆的な組織活動団体「溝辺町青少年育成町民会議」が発足した。

急激な社会情勢の変化にともない、青少年の非行は低年齢化・悪質化してきた。このことは、青少年だけを責める問題でなく、近代社会の責務であり、町をあげてこれに取り組み、明日を担う郷土の青少年を深い愛情と、強い連帯感によって、育成指導していかねばならない。

このようなことから、五十四年七月各種団体長による町民会議結成準備会が開催され、役員構成、活動方針、部活動計画などが審議された。同年十一月二十四日中央公民館に約二五〇人の参加を得て結成総会を開催、役員の選出、事業計画など議決されたあと「青少年育成の町」が宣言されたのである。役員及び活動方針は次のようであった。

▽会長 有馬四郎 ▽副会長 向井田雅成、八木鉄矢、
榎園高雄

◇組織づくり部会

▽部会長 笹峯護 ▽副会長 岩澤豊、宗像健

活動方針

- 青少年育成体制の確立、指導者の確保と資質の向上
- 青少年団体の育成と社会参加の促進
- 青少年の健康保持と育成増進
- 働く青少年の指導と福祉の増進

◇環境づくり部会

▽部会長 満塩郁夫 ▽副会長 長井彰一、前田信子

▽推進指導員 岩切又男

活動方針

- 非行防止、事故防止と補導の強化
- 自然体の教育と現有施設の整備と活用推進
- 環境浄化の推進
- 障害児などをいたわる環境づくり
- ふるさと美化活動

◇家庭づくり部会

▽部会長 東繁 ▽副会長 末元正己、今村日出子

○推進指導員 川添睦夫
活動方針

○青少年に対する生活指導の徹底

○家庭生活の健全化、明るい家庭づくり

○ふるさと伝承事業

「家庭づくり八訓」「オアシス運動」の実践推進。



「オアシス運動」のポスター

家庭づくり八訓

- 一 おはよう たいだいま おやすみなさい
いつも元気で 明るい 我が家
- 一 小さな話題 家族で語ろう 家庭の日
- 一 家庭の日 みんなそろって 健康づくり
- 一 のんびりと たまにや いいじゃないか家庭の日
- 一 汗流し 親子でつくる 家庭の日
- 一 家庭の日 親子そろって 読書会
- 一 なんでも 話すよ おとうさん
相談にのってね おかあさん
- 一 家庭の日 祖父母と会える 楽しい日

〔溝辺町青少年育成の町宣言文〕

郷土を担う青少年の健全な育成は町民全体の願いである。われわれは、子供たちの幸せを考え真の育成のあり方を深求し、家庭、学校、地域社会が一体となり、次の施策を推進する。

- 一 家庭教育の充実をはかり、心豊かな家庭づくりを推進する。
- 一 社会環境の健全化に努め、非行防止活動を推進する。

一 青少年の組織づくりとその自主的活動を通じ社会参加を積極的に推進する。

われわれは、これらの実現を図るため、溝辺町青少年育成

一 青少年育成団体などの充実と連携を強め、総合的な町

の町をここに宣言する。

民運動を推進する。

昭和五十四年十一月二十四日
溝辺町青少年育成町民会議

溝辺町青少年育成町民会議の指標（伸びる芽に、よい友、よい家、よい社会）

部 会	施 策	内 容	摘 要	幹 事 課
総 務 部 会	○普及浸透事業（町を挙げて青少年育成に取り組む姿勢） ○青少年問題協議会の開催 ○青少年育成町民会議総会の計画実施	青少年健全育成県庁席書会（文化祭で展示） 青少年育成についての基本問題の協議と町民会議との提携 各部会の事業計画のまとめ・予算・決算・普及浸透事業（機関紙立看板など） 青少年育成の日の推進（毎月第3土曜日）	○各種機関・団体との連携 ○防犯協会との連携	助 長 教 育 長 総 務 課
青少年育成町民会議 役員 部 会 長 副 部 会 長 青少年指導員 委員 会 委 員	○青少年に対する生活指導の徹底 ○家庭生活の健全化・明るい家庭づくり ○ふるさと伝承事業	家庭・学校・地域社会においてあいさつ運動・親子読書運動・話し合い活動・勤労体験・隣組活動など 家庭の日の推進・家庭教育学級・若妻学級（3歳児の現百まで） 親と子の対話・育児講座など 老人と青少年のふれあい・民謡・民話や手づくりの伝承や親睦話し合い・墓掃除など	○家庭づくり人訓 ○作文募集・アンケート調査 ○「オアソンス」運動	経 済 課 教 委 庶 務 課 コ ミ ュ ニ ティ セ ャ ン ダー 耕 地 課 議 会 事 務 局 農 委 事 務 局

一〇 上床公園キャンプ場

みどり豊かな森林を利用して、保健休養や自然環境の保全と、共同生活によって連帯意識を高め、心身ともに健全な青少年を育成するとともに、県民の森と一体となった新観光ルート施設として、昭和六十年三月公共観光施設整備事業で上床公園の西斜面の広葉樹林を利用した上床公園キャンプ場が建設された。

また樹林を縫った遊歩道も備えている。

〔施設の概要〕

面 積 六九三七平方メートル

開設期間 七月十日から八月三十一日まで

収容人員 五〇名

施設 炊事施設、キャンプファイアー場、休憩

施設、テントサイト、便所、駐車場（五

人用テント一〇張、炊事用具一式）

事業費 二二八七万六〇〇〇円

（内訳）用地費 一〇三七万六〇〇〇円

施設工事費

五八〇万円

（財源）

駐車場整備
その他

六六五万円

五万円

県補助金

一六〇万円

一般財源

二二二七万六〇〇〇円

第三章 文化と史蹟

一 文化財の指定

文化財の保護は、文化財保護法によりわが国の歴史文化などを正しく理解、認識し、文化財の保護が適切に行われなければならないとされている。文化財とは①建造物、美術工芸品（絵画・彫刻・工芸品・書跡・典籍・古文書その他）の有形文化財。②芸能（演劇・音楽）工芸技術その他の無形文化財。③衣食住、生業、信仰、年中行事などに関する風俗慣習、民俗芸能などの「無形」とこれらに用いる衣服、器具、家具など「有形」の、町民の生活推移の理解のため欠くことのできない民俗文化財。④史跡（貝塚・古墳・都城跡・城跡・旧宅）名勝（庭園・橋・峡谷・海浜・山岳）⑤天然記念物（動物・植物・鉱物）など学術上価値の高い記念物に分かれている。

このような文化財の中から特に溝辺町で指定し、その文化財の保護をして、町民の財産であることを自覚し文

第147表 溝 辺 町 指 定 文 化 財

指定 番号	種 別	名 称	所 有 者	管 理 者	保存代表者	場 所
1	史 跡	溝 辺 城 跡	麓 公 正 会	同 左	麓公正会長	{ 麓 4644—1 麓 4665—1 麓 4684—1
2	記 念 物	鷹屋神社の檜	〃	〃	〃	麓 4260
3	〃	鷹屋神社銀杏	〃	〃	〃	〃
4	有形民俗 文化財	祝儀園田ノ神	祝儀園部落	竹子小学校	溝 辺 町 長	小学校資料室
5	〃	石 原 田 ノ 神	石 原 部 落	中央公民館	〃	中央公民館

化的活用にも努める必要から、昭和五十三年溝辺町文化財保護条例が制定され、五十七年六月一日第147表の物件が、溝辺町文化財として指定された。

溝辺城跡については、その一部に十三塚畑地総合土地改良事業による基幹農道が開設され、それにあわせ林道も設置、このため、原形が少しずつ変わってきている。

祝儀園の田ノ神は、竹子小学校に保存されていたが、祝儀園部落の旧集乳所が改築され、昭和六十年里帰りができ大切に保存されている。

鷹屋神社の檜^{ヒノキ}は、老木の根の部分が道路に伸長しているため、保護の必要から昭和五十九年道路の拡張工事を行った。

冬麗の紅葉敷きある参道に応永二年の石鳥居寂ぶ

岩元右京

鷹屋神社は彦火火出見尊をまつる武の社でもある。昔は、祭日には町内各小学校から少年剣士がチームを組んで剣道の試合が行われたものである。応永年間に現在地に遷座された神社のイチヨウとヒノキの大本は、今も樹齢を誇っている。

高松城の出城なりとの立札の朽ちて吾が住む山峡

の家

(竹山) 二見みさお

高松城は、竹山の集落を見下ろす有川原の一角にそびえる山城跡である。慶長のころ島津義弘に攻められた城主北原民部は、辺川の地に勇戦、一族討死したと伝えられている。山峡の家にある現在の平和は時代の遺産でもある。

住み古りて尚知らざりき吾が街の宇賀魂神を祀る
み社

(水尻) 岩元 華枝

宇賀魂神とは、食物・稲を司る神であり、豊作の神でもある。有川の飯留神社は、そうした意味で農耕の神として氏子の信仰を集めて、今も大字有川の管理のもとに祭られている。その昔、小学校の生徒をはじめ、里人は神社前を歩行の際は、必ずお辞儀をして通るのが慣例であったときいている。

病める娘と詣る山陵蟬時雨

(竹子) 新村 ツル

闘病生活も二〇年、娘孫を交えて家族で山陵に詣った。樹木をくぐり母親をかばうかのように、孫はそっと腰あたりに手を添えて歩く姿に目頭が熱くなる思いで、ここまで来られて良かったとしみじみと思った。

千手観音のみ手のごとくに枝のびて神樹檜は山門
おほふ

(水尻) 岩元 華枝

風雪に耐えた老木には得も言えぬ風格がある。応永の御代に植えられたと伝えられるヒノキの神木は、山門に威厳を見せている。麓大字の氏神でもあり、彦火火出見尊を祭神として、氏子の信仰をあつめている。戦中は、武の神として、夜中に灯りを掲げて、神霊の出征があったと伝えられている。

南北朝の築城とぞ伝ふ溝辺城砂利荒らき林道に杉
葉散り敷く

(石原) 鶴園 鈴子

溝辺にも山城の跡は多いが、溝辺城跡は、昔から谷の城として語り伝えられている。城山のふもとに心慶寺跡もあり、町の指定文化財でもある。現在は林道が通じているが、堀切りの跡や、城井戸の跡など遺産が多い。

大いちょうの千古に旧るる太き幹空を抱きて天に
茂れり

(石原) 久藤三千夫

境内に生い茂る大イチョウは応永の遷座の時から老木で、台風にしいたげられ、幹は空洞化したのが、年々境内を暗くするほど葉をつけ実を結ぶ。実は生殖である、

枯死するまで種の保存をする。生命の活力に造化の妙を
みた思いである。

巨大なる神樹の銀杏は境内に太古の光まとひてた
てり

(水尻) 岩元 華枝

境内いっぱい黄葉を降りそそぎながら、そそり立つ神樹イチョウ、太古より変わることはない、まばゆいばかりの光をまとって、眼前に厳かに立っていると思うと、自ら身の引き締まる思いがする。

二 埋蔵文化財

(一) 遺跡の位置及び環境

溝辺町における埋蔵文化財については初版に記述されているところであるが、九州縦貫自動車道建設にともなう埋蔵文化財の発掘調査について、鹿児島県教育委員会が調査した報告書『石峯遺跡』から、その概要をまとめてみる。この調査は、昭和四十六年から昭和五十五年二月にかけて、九州縦貫自動車道建設予定地のうち、吉松町、栗野町、横川町、溝辺町、隼人町、加治木町、始良

町、吉田町、鹿児島市の一市八町で行われている。溝辺町内では、木佐貫原、石峯、南十三塚などが主に調査されているが、石峯遺跡について要約する。石峯遺跡は、鹿児島空港の北西約二歳の地点にあり、標高約二八〇呎の台地縁辺部で、北東方向に霧島連山を望む景勝の地である。遺跡地は、鹿児島県のほぼ中央部にあり、地形は溝辺町の中央の上床山と高屋山陵によって二分されている。一方、東南部は標高二〇〇～二八〇呎の通称十三塚台地といわれ、北原から東南方向へ隼人町境まで、さらに西南へ縦走、崎森と加治木町境に至り、西方は弧状となつて崎森川の溪谷を望む約二〇平方呎に及ぶ広大なシラス台地である。

この台地は昔から灌漑水利の便に恵まれず、ほとんど畑地となっている。かつては夏は甘藷を主に大豆や陸稲、冬は菜種を主に麦などの栽培を行っていた。昭和四十五年ごろから集団茶園化が促進され、現在では台地全域茶畑が多い。台地北方東側の一部は、昭和十八年から海軍航空隊の基地として使用され、さらに昭和四十六年には、台地北方三角部分にあたるうちの東半分が鹿児島空港として生まれ変わっている。

石峯遺跡は台地のほぼ北端、三角形の台地の西側縁辺部にあり、崎森川の源となる狭い谷水田を望む崖端部から東南へ約三五〇呎に及ぶ範囲にある。現在この西側縁辺部および傾斜面に石峯・昭和の集落が形成されている。溝辺町の遺跡については、ほとんど知られていなかったが、昭和四十一年に河口貞徳氏によって初めて石峯遺跡の発掘調査が行われ、学問的研究のメスが加えられた。調査地点は、今回調査の崖端部地区の北隣に近隣する鳥丸親男氏宅地内で、今回報告の遺跡と同地域である。

この調査で第四層に出土した、器面に橢円型文と変型撚糸文の二つの文様を施文した土器を「石峯式」と早期に設定している。また、上層の第三層には、貝殻条痕文土器、山形押型文土器、平椗Ⅱ式土器、第二層には塞ノ神B式土器などが出土している。

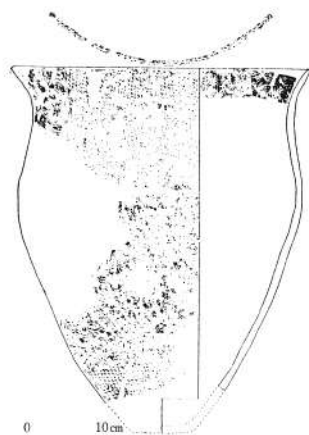
昭和四十五年には、鹿児島空港建設にともなう調査が行われ、手向山式土器、阿高式土器、重弧文土器、成川式土器など発見している。そして九州縦貫自動車道建設にともなう埋蔵文化財の調査によって遺跡の発見があいづぎ、内容は細石器時代までさかのぼることが明らかとなっている。

(二) 調査の概要

石峯遺跡調査の発端は、高屋山陵墓官岩元勇彦氏が溝辺町麓上石峯、鳥丸広志宅地出土の特殊な縄文土器に強い関心をもったことにはじまる。岩元氏から当の縄文土器片を分与された河口貞徳氏は、昭和四十一年八月、鳥丸広志氏宅地の発掘調査を行い、前述の土器の残存部分を発見した。

同遺跡が一〇年余を経て、九州縦貫自動車道路線予定地となって発掘調査が行われた。この調査で前記の土器の様相も明らかにされるものと期待されていたが、この土器は発見されなかった。そこで前記の土器の復元を行う

第50図 復元した石峯式土器



い掲載することにした。第50図の石峯式がそれである。

縦貫道路線予定地の石峯では、網掛川の支流、崎森川が開析した谷頭分岐部を横断し、前記の鳥丸広志氏宅地（現在鳥丸美登氏所有）南側を隣接しながら南東方向へ湾曲し、協同組合茶コントロールセンターの東側をかすめて南進している。このうち、遺跡地として調査対象となったのは、崎森川谷頭の東壁にはじまり、石峯～嘉例川を結ぶ町道まで、距離三五〇㍎、幅50～60㍎、面積二万一〇〇〇平方㍎である。

調査地域は、北西限界の谷にのぞむ集落に属する部分と、集落より東へ展開する畑地に属する部分からなり、集落をほぼ南北に走る県道白石～論地線が遺跡を分断する形となっている。

石峯は麓集落で、現在の県道とほぼ一致する旧道があり、この旧道に沿って発達した街道町の形態をとっている。集落の中心には、三〇一・三㍎の最高点をなす小山を背後にもつ照明寺があり、寺よりやや南に吉兵衛茶屋があった。現在は空港設置の影響をうけて、商店数も数軒以上に増えている。

この集落は永い間、西側の崎森川の谷につくられた細

長い水田地帯と、東にひろがる畑地帯を対象として農耕を続けてきた集落である。現在でも集落内には、深さ三〇呎を超える井戸が残っているが、深井戸を掘る技術がなかった時代には、崎森川の谷が水源であったと考えられる。いまま各戸から谷へ通ずる道が家ごとに存在し、水田へ通う手段となっているが、かつては、水くみに使用された道でもあったと思われる。先史時代の立地条件がそのまま引き継がれたものである。

石峯の地形は、照明寺裏山を最高地点として崎森川の谷壁に高く、東にわずかに傾斜している。宅地は谷に近い高地点を選んで設け、入り口は階段または坂となり、玄関へは、入り口の道から直角に屈折してはいるように造作されている。いずれの宅地も必ず池、築山、庭木の植え込みをもつ庭園を例外なく備えている。

遺跡付近は標高が割合に低く、道路面との差が小さい。しかし、発掘の結果、県道に沿って旧道が発見されたが、深く掘り込まれていて、宅地への入口は傾斜を保つよう工夫されていた。

遺跡地は県道を挟む住宅跡地と、東へ続く畑地とから成っている。調査の都合上住宅跡地は県道を境として、

県道から谷までの北西端を第一地点とし、県道から畑地との境界までを第二地点とした。畑地跡はほぼ三等分して北西方向より南東方向へ、第二地点に続いて第三地点、第四地点、第五地点とし、この区分に従って調査を行った。さらに調査実施のために、一〇呎単位の区画を設けることとし、縦貫道工事のために設けられたセンターラインのうち $STA_{349+20.0}$ 杭と、 $STA_{349+40.0}$ 杭との間の線を縦線の基準とし、これをE線と名付けた。E線と平行に一〇呎間隔の縦線を設け、西南方向より東北方へD'、C'、B'、A'、A、B、C、D、E、F、G、H、Iと名付けた。

縦線と直角に交わる線のうち、 $STA_{349+20.0}$ 杭を通る線を横線の基準とし、これを七線と名付けた。七線と平行に一〇呎間隔の横線を設け、北西端より南東端へ、三線、三九線と名付けた。縦線と横線とによって囲まれた一〇呎四方の区域を調査単位とし、南西の線と北西の線との線名を連記して区域名を表すこととした。例えばA-5区のようなものである。

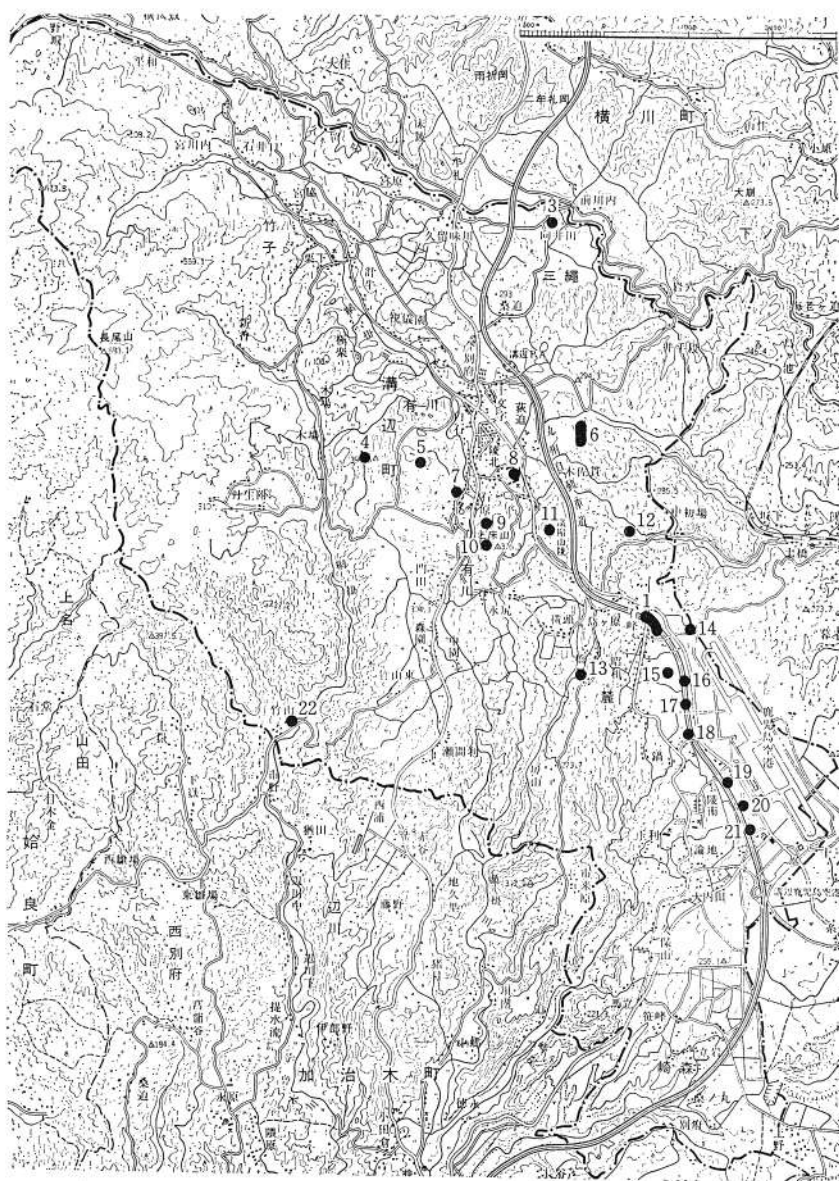
調査は、二次にわたって行った。第一次は、昭和五十年十月二日から十二月十九日まで、第二次は昭和五十一年

第148表 石峰遺跡の周辺遺跡一覧

	遺 跡 名	所 在 地	地形	遺 物
1	石 峰	溝辺町麓石峰	台地	
2	中 尾 田	横川町中野	〃	縄文（前・中期）中世山城
3	向 井 田	溝辺町三縄向井田	山麓	土師器片
4	据 石 ケ 岡	〃 据石ヶ岡	山地	押型文土器
5	倉 ノ 山	〃 有川倉ノ山	台地	弥生
6	木 佐 貫 原	〃 麓木佐貫	〃	縄文（前・後期）
7	石 原	〃 有川石原	〃	縄文・弥生
8	管 ノ 口 B	〃 管ノ口	〃	弥生
9	〃 A	〃 〃	〃	弥生
10	管ノ口(上床山)	〃 〃	山林	石斧・土器片
11	高 屋 山 陵	〃 麓	〃	
12	中 野	〃 中野	台地	縄文・弥生・土師器・須恵器
13	横 頭	〃 麓横頭	〃	縄文・弥生・土師器
14	十 三 塚 原 点 第 一 地	〃 空港内敷地	〃	縄文（手向山・塞ノ神・阿高式）
15	柳 ケ 迫	〃 麓松ヶ迫	〃	細石器・縄文（後期）
16	長 ケ 原	〃 麓長ヶ原	〃	細石器・縄文（前期）・弥生・古墳期
17	松 木 原	〃 麓松木原	〃	弥生（後期）・古墳期
18	葛 根 塚	〃 麓葛根塚	〃	〃 〃
19	七 ツ 次	〃 麓七ツ次	〃	縄文（後期）・弥生・古墳期
20	松 ケ 迫	〃 麓松ヶ迫	〃	弥生（後期）・古墳期
21	木 屋 原	〃 麓木屋原	〃	縄文（早・前）・弥生・古墳期
22	竹 山	〃 有川竹山	山麓	縄文（前）

(① 河口貞徳『日本考古学年報』1966年 ② 鹿児島県史跡調査会「始良郡溝辺町大型空港建設地内における埋蔵文化財発掘調査報告書」1971年3月 ③ 鹿児島県教育委員会「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」九州高速道路鹿児島線（加治木～吉松間）1973年 ④ 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」1977年 ⑤ 鹿児島県教育委員会『鹿児島県市町村別遺跡地名表』1977年 ⑥ 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ」1978年 ⑦ 鹿児島県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」1979年 ⑧ 溝辺町郷土誌編集委員会『溝辺町郷土誌』1973年による）

第51図 石峰遺跡周辺地形図



年十一月二十四日から五十三年五月十五日まで、足かけ四年にわたる調査であった。

調査の方法としては、第一地点、第二地点は第一次調査によって深層まで遺物を包含していることが予察されたので全面発掘を行い、第三、第四、第五地点は第二層の土師^{はじ}などの包は全区域に認められたが、第三層以下は、局地的な埋存の可能性も考えられたので、第二層までは全面発掘を行い、第三層以下は、二層間隔のトレンチ掘りを行い、遺物、遺溝の出現にしたがってこれに応じて範囲を広げて掘るという方法をとった。

縦貫自動車道の建設工事のため設けられた工事区域の区分は、一見遺跡調査とは何のかかわりもないように考えられるが、実は遺跡の調査に関係をもつことが調査実施の階段で明らかになった。調査区域には二つの工事区があり、このうち石峯工事区は完成期限が早く、調査の進行との調整に問題のあることが判明した。幸いに石峯工事区には割合に遺物の出土量が少なく、遺溝が存在しなかったため、調査員の増員によって調査の手順を変えることなく続行して、道路工事にも支障はなかった。

三 文化協会の設立

溝辺町の文化活動は、古い伝統の中で文芸、手芸、工芸、音楽、民舞等々、広範囲にわたって、それぞれの地域やグループによって育まれてきた。

昭和四十一年中央公民館が建設され、さらに四十七年鹿児島空港の開港、コミュニティセンターの開設などにより、町の近代化への基盤づくりが進められた。これを契機として、総合的・組織的な活動による地域文化の向上への認識と意欲が高まり、五十一年十月四日、一八団体によって「溝辺町文化協会」が結成された。規約によるとその目的を次のように定めている。

- ① 各文化団体の活動助成
- ② 各文化団体の連絡提携
- ③ 文化祭を開催し、発表の場をつくる
- ④ 郷土文化の継承保存

(一) 文北協会の活動

発足後の文化協会の活動の主なもの、文化祭の開催、地区芸術祭への積極的参加、協会誌その他文芸誌の

発行など、きわめて活発である。

文化祭は、四十九年第一回（郷土誌初版発刊記念）、五十年第二回（町民歌発表会）を実施していたので、第三回（名誉町民松山績氏顕彰）から五十六年の第八回までを文化協会主催で実施した。

一方、五穀豊穡に感謝し、生産意欲の向上を図るため、町主催による「農村振興大会」が毎年実施されていた。五十七年に至り、この農村振興大会と文化祭を合併して「みぞべふるさと祭り」とすることとなり、以後町及び文化協会が一体となって、毎年十一月三日盛大に実施している。

また五十年から実施されている始良地区芸術祭第一〇回大会（昭和五十九年十一月）を本町で開催し、会員の努力によって、会場設営、大会運営などについて、高い評価を得た。

（二）歌碑の建立

高屋山上陵を奉持する溝辺町には、古くは頼山陽や、作家の吉川英治・石坂洋次郎、歌人の斎藤茂吉ら、多くの文人・名士が訪れている。

歌人斎藤茂吉は、昭和十四年十月六日高屋山上陵に参拝し、和歌八首を詠んでいる。協会では、昭和五十八年六月、茂吉歌碑の建立を決議し、建立小委員会を設置して事業に着手した。約三〇〇万円と見込まれる事業費は、「溝辺町文化事業基金」として広く町内外の有志諸賢の浄財を仰ぐこととし、募金活動に四年の歳月をかけ、大きな努力を払った。

六十二年二月六日、上床公園小鳥の森の一角に、歌碑が建立された。高さ約三メートルの岡山産みかげ石には次の一首が刻まれている。

ひむがしの空にあきらけき高千穂の
峯に直向ふみささぎぞこれ



斎藤茂吉歌碑

そして同年十月六日、町内外からの来賓、関係者約一

〇〇人の出席のもとに、「斎藤茂吉歌碑除幕式」の祝典が盛大に挙行された。この歌碑が、本町の文化興隆の基となることはもちろん、観光資源としても大きな役割を果たすことが期待されるところである。なお、建立事業費の残金は、文化事業基金として運用され、本町文化事業の振興に大いに貢献するであろう。

(三) 歴代役員

○会長

最勝寺良寛 51年～54年

岩元 保雄 55年～56年

二見 剛史 57年～現在

○副会長

岩下 晃 51年～56年

岩元典男、岩元華枝 57年～60年

岩元典男、重森ふぢ 61年～現在

(四) 加盟団体

団体名	代表者名	部員数
文芸同好会	玉利 卓也	一二
工芸クラブ	岩下 晃	四
寛友書道会	最勝寺 良寛	一五
書道・晴心会	北里 晴山	一〇
書道同好会	畑中 幸雄	一二
岩元書道会	岩元 典男	八
溝辺写真会	長野 政弘	八
箏曲	瀬戸山歌寿奈	四
みぞべ高屋コーラス	松山 絹江	三一
春日流寿鳳会	竹ノ内 照子	二五
舞踊・寿美鈴会	神田 すみ子	九
暁吟詠会	有馬 アサ子	四
詩吟光岳流溝辺支部	玉利 秀子	八
レクダンス	今村 日出子	五
生花教室	重森 フヂ	三六
鹿児島大津絵節保存会	波江野 実	四
棒おどり保存会	剗岩 梨作	二五

水の会	堀	英司	八
着付茶道同好会	岩元	里枝	二〇
手芸編物同好会	川床	友子	二〇
切手同好会	町田	英司	八
SPM葉月会	岩元	康良	一九
寒蘭万年青同好会	国生	重雄	一七
花木同好会	山本	継甫	二〇
栄養改善推進協議会	東郷	瞳	一五
三味線・藤音会	七枝	豊	一二
三味線・繁美会	向江	政廣	二〇
鈴教室	沼口	つや子	一〇
茂吉歌碑短歌の木碑沿ふ小経文学の道となづけられたり			

(石峰) 重森フヂ

茂吉の文学碑は文化協会の努力によって六十二年十月上床公園の一角に建立された。会員みんなの汗の結晶と思って一段と歌碑によせる近親感がわき、幾度か足を運び歌の心を味わう昨今である。

四 十三塚原海軍特攻慰霊碑

(一) 碑建設の経過

十三塚原の旧海軍航空隊は、太平洋戦争末期に、国分海軍航空隊第二基地として発足し、大戦中多数の若人たちが、祖国防衛のために沖縄周辺の敵艦船に対して決然として特攻を敢行したところである。しかしながら、こうした多くの尊い犠牲も空しく、戦局は敵の物量攻撃の前にあえなくついで、涙をのんでついに終戦をむかえることになった。すなわち、今次大戦の末期における連合軍の攻撃は、物量をたのみ激烈を極め、戦局は日に日に衰退を余儀なくされ、憂悶の暗雲は日本の全土を覆い、国家民族の興亡を賭ける最悪の事態に突入したのである。この累卵の危機に対して、敗色を一気に挽回すべく、一機よく一艦を撃沈する特攻作戦が採用され、二五〇キ爆弾を抱いた愛機もろとも、敵の艦船に突っ込んだのである。世界戦史上類例のない肉弾戦法によって、童顔消えやらぬ若人たちが七生報国を胸に、莞爾として再び帰ることのない祖国を飛び立ったことを思えば、感無

量なものがある。

そして、星移り時は流れて、往時を語る人も少なくなり、わずかに心ある人々が、現場を訪れては追悼の頭を垂れるのみとなった。その現状にしのびず、昭和五十二年七月、特攻慰霊碑建立委員会を結成して、町内外の協力を得て浄財を集め、約二年の歳月を経て、上床公園の一角に十三塚原海軍特攻の碑を建立したのである。総工費約八〇〇万円余、台座及び工事は、本町在住の石工、川口光夫氏の施工によるもので、内之浦産のみかげ石を引き、台座一・五呎の巨石を使用したものである。

除幕式は、五十四年四月六日、町長（有馬四郎）はじめ特攻碑建立委員会の人々や、特別参加来賓として、十三塚特攻追跡調査に当たった久留米市在住の関喜代子氏、故宮内栄中尉の遺族（妹の直井みつ・とし子両氏）単人町鶴丸りつ氏ら、町内外の関係者を交えて盛大に行われた。あいさつの中で、特攻碑建立委員長今吉進氏は「従容として大義に殉じ、身を鴻毛の軽しとした忠烈無比、史上不滅の偉勲は、とこしえに語り継がるべきものであり、また今日の平和は、これら勇士の犠牲の上にこそ存在することを改めて確認したい」と、涙ながらに述

べている。

ブロンズ像（日影会員で金沢市在住の川岸要吉氏作）は、南の空を見つめる飛行服のうら若き勇士をかたどり、平和日本の礎石として、祖国の危急に殉じた少年兵の、憂国の至誠を彫り上げている。

「白雲にのりて 君還りませ」——鎮魂の詩文（溝辺町有川・岩元潔作詩）は有馬秀曉氏（溝辺町石原在住・有馬アサ子）によって朗々と奉詠され、戦没者の遺族をはじめ、並みいる参列者の胸深くしみ入る思いであった。



十三塚原海軍特攻慰霊碑

碑文

白雲に のりて

君 還りませ

さくらの そよ風

菊の かおり

あなたの 守り給える

ふるさとは いま

平和に

満ちています

なお、特攻碑の横に山口県防府市からの飛行練習機が展示してある。溝辺町の要請により自衛隊の理解と協力によって、貸与展示を許されたものである。この事業に対しては郷土出身の海上自衛官竜崎忠記二等海佐に尽力いただいたことも付記したい。練習機は二〇〇〇時間耐空のプロペラ機で、戦中の艦爆とは、ある類似点をもつ複座の中葉機である。特攻の御霊が、還り休む目印として、そして平和を祈るよすがとして、上床の青い芝生にゆったりとして翼を休めている。

(二) 国分海軍航空隊の状況

国分海軍航空隊が設立されたのは、昭和十八年八月である。溝辺町の十三塚軍用飛行場は国分航空隊第二基地として、隣接町村の奉仕作業などにより建設を急ぎ、二

十年三月十八日には、国分第二基地（十三塚）から第一回特攻が敢行されている。すなわち神風特攻菊水作戦であり、彗星隊（彗星艦上爆撃機二七機）零戦（零式戦闘機一三機）が午前六時一三分から同五八分に、第一、第二国分基地から発進、沖縄周辺の敵空母群に体当たり突入を行っている。翌三月十九日は、彗星二三機、零戦二四機が、敵空母ワスプ及びフランクリンを攻撃、決死の体当たり特攻を敢行し、さらに翌三月二十二日には彗星一七機をもって敵空母群を撃沈した」と記録に残っている。

さらに三月二十九日には、彗星四機が敵戦艦群に突入、四月六日は第二基地（十三塚飛行場）から九九式艦上爆撃機（二人乗り）四九機が出撃、特攻を敢行している。隣郡菱刈町出身の時任正明少尉が戦死したのも、この日の三番隊指揮官機であった。

このようにして六月三日、最後の六機が出撃するまで、国分海軍航空隊の第一、第二基地から出撃して、壮烈空に散った若き戦士たちは、現在の記録に残るだけでも三九五名に及んでいる（本町出身の町田三郎少尉もその一人であるが、本町関係者は次に詳述）。第二基地（溝辺十

三塚原)から、出撃して戦死したものは一四七名となっているが、これは記録に残されている数だけであって、このほかにもまだ判明しない戦士もあるかも知れないことを思えば、切々として胸痛む思いである。

町田三郎少尉の玉碎

本町十文字の町田三郎上飛曹(当時)は、二十年四月十二日菊水二号作戦に出撃した、郷土出身の唯一の特攻隊員である。彼は、九九式艦上爆撃機二〇機編隊の一番機、津久井中尉の操縦する指揮官機搭乗の偵察員(主に通信、爆撃を担当する役目)であった。

当日の状況は、天候快晴、雲なし、風向北西・毎秒六メートル、視界八の恵まれた天気であったと記録されている。

宇佐空、名古屋空、九五一空から派遣された九九式艦上爆撃機二〇機で菊水二号作戦の特攻隊を編成し、午前一一時三〇分、国分基地を発進、午後三時ごろ沖繩周辺の敵艦船群の攻撃に成功。雲染む屍として壮烈な戦死を遂げたのである。当年二〇歳。後、戦功によって二階級特進の海軍少尉に任ぜられるが、彼が、戦場の空から打電した最後の電文は、本部基地の通信所にキャッチされている。

「コウゲキニセイコウ、ワレイマヨリタイアタリス」この電文を発信後、未帰還戦死となっている。

『沖繩航空戦誌』による菊水二号作戦の戦果としての発表によれば、この日の作戦に参加した飛行機は「九九艦爆二〇機、(六〇一空指揮下) 九七艦攻一三機、桜花八機」であって、これによって敵を撃沈したものは、「特空母一、戦艦一、巡洋艦二、不詳七隻。撃破したものの戦艦二、輸送船一、不詳五」であった。当時使用し得る飛行機が少なかった割には、以上の戦果があり、外電による米軍の情報は混乱し、攻撃がいかに激しかったかを物語り、戦果はこの推定したところとおおむね同様であったという。

彼は少年時代から、それほど頑健な方ではなかった。体格も中肉中背で、性格も温健、努力型の少年であった。溝辺村立青年学校の普通科に学びながら、小学校の使丁を奉ずる、いわゆる「働きつつ学ぶ勤労青年」であった。彼は、大山元帥の歌が得意で、当直の夜など布団をかぶってからも、大声で歌ったものである。

一部のラジオ聴取者の記憶によれば、出撃の前々夜「鹿児島県町田三郎、大山元帥の歌を」と述べて

海濤^{うみ}天を衝くところ 燃えて火を吐く桜島

薩摩が生める快男子 姓は大山名は巖^{いわ}!!

と従容として第一節だけを歌ったという。わが生い育ったなつかしき山河、目の前に幼少遊びなれたふるさとの風をききながら、血縁の親兄弟や、秘かに温めた意中の面影など、最後の思いを決別の歌に託したのではなからうか。時代、精神を共有した感傷のみでなく、ひたすら冥福を祈るものである。

このほかにも溝辺町から、今次大戦に少年航空兵として志願、南海の大空を血潮に染めて散華した有川出身園田朗兵曹長（甲飛一期生）、麓玉利の山下忠男上飛曹、石原の岡元一廣一飛曹、三繩の山下不二男二飛曹等々、颯爽^{さうそう}とした飛行帽のひとみが、なつかしく呼びかけてくる。さわやかな風につて、これら護国の魂はおりに特攻碑を訪れることであらう。

(三) 遺書・遺詠など

遺詠

征く心撃滅の二字にたぎるなり
二十年四月二十八日出撃寸前

軽き生命の重きつとめぞ

若桜 花の蕾や香るらん

大いなる朝 今日ぞ来にけり

遺書

○宮内栄（第三草薙隊・茨城県・中央大・二三歳）

父上様、母上様、栄はこれから出撃します。

我儘な私を立派に育成して下さいまして、而も帝国海軍航空隊員となり、今回栄ある神風特攻隊第二次草薙隊として、出撃出来る様になりましたのも、皆父上、母上の御蔭と、栄は有難く涙を流して居ります。

必ず御期待にそむかず、敵を撃滅して日本の国を護ります。

近くの山に咲く桜花は栄の立派な生れ変った姿です。

幼くして出郷する時、母上から受けた教訓は立派に実行して来ました。酒と女でしたね。今まで酒は少しやりました、女は全然知りませんでした。

今となっては、何も思ひ残すことはありません。只日本の必勝のみであります。栄は日本の必勝を断じて信じて居ります。

箕輪様や久保様や又親戚の方々にも色々御世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

折りがありましたら靖国神社で待って居りますから、面会に来て下さい。土産物はありません。（中略）

沖繩が私の最後の場所です。昨晚最後の夢を、拳母町の、きらく亭で見ましたが矢張り父上様と母上様の夢でした。

くだらない事を書いて全く女々しいやうですが、御許下さい。

では皆々様の御健康を祈って、出撃します。

昭和二十年四月十三日 栄より

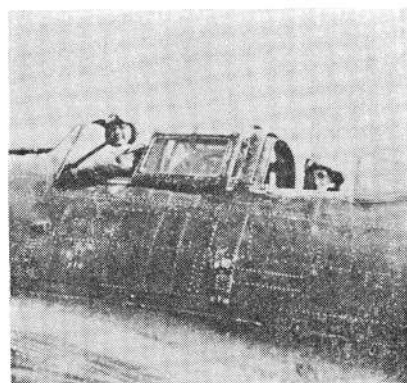
父上様母上様

御膝下

（昭和四十七年五月、靖国神社々頭に掲示されたもの）



出撃前辞世を記す



出撃直前の宮内機

関喜代子氏は、久留米市の人である。靖国神社社頭に掲示されていた故宮内栄中尉の右の遺書を読んで、その純粋な愛国の至情に感動し、特攻勇士の軌跡を追求して、名古屋海軍航空隊跡、さらには最後の発進地である

国分海軍航空隊第二基地（十三塚原）まで訪ねて、その記録をさがし、私費を投じて『草薙隊吾が前進』を編集発行したのである。こうした特攻追跡の記録が前述の事情と相まって、十三塚原特攻碑建立の導火線となった

撃心
中
井上信高第三草薙隊
大坂府甲飛十三期一八歳
父上様母上様
乱筆御免下さい
十八才の此の年迄信高の面倒を見て戴きまして、誅に有難う

宮内中尉の遺墨

ございました。

私もいよ／＼軍人の最高名誉の特攻隊に加はり出撃することになりました。其の間何一ツお知らせ致すことが出来なかったのを残念に思つてゐますが、これも軍事のこと止むをえません。

然し信高は悔んだりはして居りません。今迄お世話になった父母上様を始めとし、この私を一人前として戴いた上官の方々と周囲の人の御恩で胸が一杯です。

どうか大東亜戦争の勝抜く日迄達者であつて下さい。私の体はなくなつても魂だけは残つて、父母上様の元気なお顔を靖国の空より拝見させて戴きます。

いよ／＼が最後です。色々と書きたいのですが、これから書いてよいやらわかりません。

昭和二十年四月二十七日（出撃前日）隼人町鹿兒島神宮で偶然一緒になつた溝辺村有川松田ヒデさん（丹生村松田一夫氏の母堂）に託した一枚の便箋に鉛筆で走り書きした井上信高二飛曹の最後の手紙である。

書簡

○鶴丸リツ氏のたより

井上信高様の御両親様へ

初めてでございます。只今、御子息信高様の尊い出撃の飛

ことも事実である。関氏は同書の「あとがき」の中で「この小冊子がひとりでも多くの心ある方々に受けとめられることを、また時代精神を共に連帶された方々には無論のことですが、むしろ時代を違える若い皆様にごそ、ご一読をと心から熱望いたしております」と結んで

る。

○井上信高（第三章薙隊・大阪府・甲飛十三期・一八歳）

父上様母上様

乱筆御免下さい

行機を、長い竹の先に日の丸の旗を結び付けてあふれ落ちる涙と共に打ち振りお見送り申し上げました。

昨夜でございました。「小母さんたちはお庭で井上さんが見えなく成っても日の丸の旗を一生懸命振りますわ」と申上げました。「それぢや小母さん、僕たちは小母さんの処の空を低空で飛びます」と約束して下さったので御座居ます。

出撃はお昼過ぎとの言葉に、正午を過ぎますと家中は勿論、お隣りも、その次も、只々西の方の山上の飛行場からの爆音を今か今かと待ちして居りました。三時がなりますと間もなく信高様方の飛行機が一機二機と私宅の真上を低く勇ましく大きい爆音で南の空へ飛んで下さったのでございます。

口ををすすぎ身を淨めました。神前に成功をお祈りして御両親様に種々とお聞きして頂き度く拙いペンをとりました。どうぞお聞き下さいませ。

信高様にはじめてお目にかかりましたのは、去る二十五日の夕方四時でございました。すぐ隣りに住んで居ります主人の姉宅を訪ねて見えた三人の方の、始めて見ます特攻隊の御服装に早や胸を打たれ、義姉の生憎の留守のままに、私宅に来て頂いたので御座居ます。その夜は十二時過ぎまでお話し申上げたり艦爆の歌や、体当りの歌などを唄って頂きました。

た。後十数時間のお命の方々とはどうしても思へません。淡としてあくまで無邪気で面白い信高様のお姿でございました。

でも体当りの歌の

いよ／＼これが最後です、父様母様お元気で、

白木の箱がとどいたら、泣かずにはめて下さいね、

お三人で合唱なさる時などは泣けて／＼仕方が御座居ませんでした。

晴の御出撃迄に又外出が叶ひましたら、もう一度どうぞお顔を見せて下さいね、とお願ひ申上げましたところ、昨夜、当地に連続の空襲で電燈もつきませんので早く床に就いて居りましたら、十一時過ぎに「小母さん」と言ふお声に飛び起きたのです。さうしたら、まあ先日よりも多く五人、月の光にぬれてお庭に立つてゐられるでは御座居ませんか。皆様遠い／＼一里余りのお山の上からそっと抜け出て、わざ／＼最後の別れに来て頂きました。御芳志の勿体なさに、有難さに私は暫く言葉も出ませんでした。お察し下さいませ。

お文は、私のこのペンで、お縁で、明るい月の光で認められたので御座居ます。おふくろさんがやはり懐しいなあ、とおっしゃる度に、皆様も「そうだ、やはりおふくろが恋しいなあ」と遙か月のお空を縁に寝ころんで眺めつゝ想

ひを故郷に馳せてゐられるお姿を、どのような気持で眺めて居られました事か。私共大人も及ばぬ、大きな立派な、お働らきをなさって平氣でお国に殉じて下さる信高様もやはり「まだお乳恋しい十八才の少年で御座居ました。大事な体ですから、少しでもお休みなさいね、とおふとんをのべて上げますと、「あーふとんはいいなあ」と喜ばれて「小母さん、四時にはおこして下さいよ」とおっしゃりつつ、暫くの間は寝ながら話したり歌ったりしてゐられましたが、いつとはなしに安らかにおねぶりになりました。もう一時で御座居ました。皆様のお寝顔にお寢息、又涙があふれて仕方が御座居ませんでした。

月の明りをたよりに、小豆を炊いてお赤飯と粗末ながらと、心を込めてお吸物も出来上りました。時計の針の今朝ほど早く進むやうに思へた事は御座居ません。四時迄よく眠つてゐられるのを本当に胸が痛む想ひでお起し申上げお酒もございませんで、熱いお茶を差上げて、心からの御出発をお祝ひ申上げました。お山の飛行場迄でも一緒にいてゆきたい、私共が少しお送り申上げますと、「冷えるからもういいですよ」と優しい事をおっしゃりつつお姿は遂に町の角に見えなくなりました。

かねがね、特攻隊の方々を拜まして頂きたく思つて居りま

した私にとって、二、三人でも只真心を込めて暫くの間でも、お世話させて頂きました事は、ほんとうに心からの喜びで御座居ました。うれしい有難い事で御座居ました。

初めてお逢い申上げました夜、皆様のお顔は一度どこかで見たやうなお顔ですけど、初めて拝見するやうでないとお申上げましたら、信高様が「小母さん、これも前世ですよ、前世でお逢ひしてゐるのですよ」と面白さうにおっしゃるのです。

「さうですね、ほんとうに」と申上げつつ袖すり合ふも他生の縁なればこそと思ふ事で御座居ました。

今日は本当に美しい新緑もまばゆいばかりの上天気で御子息方の御出撃にふさはしい日で御座居ました。

十七才の愚息長男がお屋根に掂げました即製の大きい日の丸がお空から見えました事か、私共の打振る日の丸が判つて頂きました事か、例へ判つて頂きました中でも、私共も石にかざりついても頑張つてこの戦ひにきつと、きつと勝ちますから、どうぞ御心安らかに征つて下さいませと、心の中にお誓ひ申し上げる事でした。

もう四時過ぎ、今どこの海の上を飛んでゐられることやらなど想ひつつ認めまして涙ばかりこぼれてまして、乱文乱筆何卒御判読下さいませ

最後に信高様のやうな立派な方をお産みお育て下さいまし

た御両親様に、深い／＼心からの尊敬と感謝を捧げます。

では皆様、御一緒にがんばりませう。

御気嫌よろしう

さやうなら

鶴丸 リツ

四月二十八日夕

井上高太郎様

御奥様

昭和二十年四月二十八日、国分第二基地（十三塚原）から出撃した井上信高二飛曹の遺族に送った単人町の鶴丸リツ氏の便りである。特攻隊の状況や、国民一般の特攻隊への心象の実情がよくわかる。

（四）鎮魂の詩

最後に特攻碑に捧げる鎮魂の詩の原文となった詩編を記録して、祖国安泰のために尊い血潮をもって殉じたこれら勇士の冥福を祈りたい。

鎮魂

作詩 岩元潔

祖国の安泰を念じて雄々しく散華した

父よ、夫よ、恋人よ、そして 弟よ

南海の果て、蒼く冷めたい波の底に、いつまでも

彷徨ことはない、さあ南風の輝く白雲にのって

みたまよ、帰っておいで

そよ風に舞うさくらの花びらに、かつての君の

笑顔がある

黄菊、白菊かおる秋の日差しに、あなたの囁きがきこえる

いまふるさととは、繁榮と平和に、せいせいと息づいている。然しそのかげに、赤い血潮を民族の危急に捧げて散った、うら若い空の勇者、あなた方のあることを、私達は忘れない

想い母国に打返す波のように、今日もまた

白南風^{はな}にのって、なつかしいふるさとへかへりませ

雲の墓標、みたまよ、安らかに、安らかに

十三のみ魂眠れる十三塚原畑総整備に形変るも

（石原） 鶴園 鈴子

その昔、八幡神社の正統を争って、宇佐八幡よりひそかに焼打ちをかけたが、その黒煙は、自ら正八幡の文字を現

じたという。使者は驚いてこの地に至り、つぎつぎと弊れたので、里人はこれをあわれんで塚をつくり葬ったという。

平和なる鹿児島空港に向けて立つ特攻兵の顔は幼し

(石原) 鶴園 鈴子

太平洋戦争末期―自ら身を挺して国難に殉ずべく、一機よく一艦を葬る作戦に出る。称して特攻隊という。幾百の若い命が、南海の空に、沖縄の海に、桜の花びらのように散ったのである。

五 西郷隆盛像の建立

鹿児島空港前の麓八五六番地、六三八七平方メートルの町有地に、昭和六十三年五月二十八日「現代を見つめる西郷隆盛像建立実行委員会」によって、銅像が建立された。

同年八月二十八日盛大な除幕式を行い、これを町に寄付し、町の管理となった。

この銅像は、日本芸術院会員・日本彫塑会理事長・日本常任理事・日本陶彫会会長古賀忠雄氏の製作で、富山県高岡市の黒谷美術株式会社が鑄造したものである。像の高さ一メートル、重さ三〇〇キログラムは、国内の人物像では最大級



現代をみつめる西郷隆盛像

のものといわれる。その容姿は、紋付羽織・袴の正装で、高さ五メートルの台座上から、東の空を見すえた雄姿は、まさに「現代を見つめる」堂々たる風格である。

この像は、昭和五十二年、当時参議院議員であった故迫水久常氏が、京都の護国神社に建立すべく、前記古賀忠雄氏に製作依頼中のところ、両氏とも病没して計画が頓挫していった。ところが、六十二年六月二十五日付けの南日本新聞に古賀氏の遺族の「できることなら西郷さんの郷里に建立できたら」との意思が掲載された。町商工立志会の有志がこの記事に着目し、早速計画を立て、町が全面的に支援することとなった。約九〇〇〇万円にの

ぼる資金はすべて募金によって調達されたものである。建立敷地は、財団法人溝辺町開発公社から、昭和六十三年八月町に寄付されたもので、帳簿価格約一億三〇〇〇万円である。

事業費の概要（一部見込み）は次のとおり。

募金		支出	
		(単位：万円)	
町内	三五〇〇	本体	四八三〇
町外	四九九九	台座	二六七〇
県外	七〇〇	募金経費	六〇〇
国外	一	除幕式	六〇〇
		記念誌	五〇〇
合計	九二〇〇	合計	九二〇〇

町は西郷隆盛の「敬天愛人」の偉大な思想をひろめるにふさわしい、かつ町活性化の拠点とするに足る環境を整えるべく、まちづくり事業の認可を得て、約四億円の事業費で、昭和六十三年度から逐次施設整備を進めることにしている。

○西郷像建立実行委員会（立志会のみ）

木佐木信広、住吉智、今吉美喜男、馬場一春、木佐木俊春、米丸実幸、徳永政彦、徳永俊博、坂留輝幸、大

坪徹、堀之内忍、北山秀明、有村幸二

▽渉外部長Ⅱ岩元勝芳▽会計部長Ⅱ上原良喬▽教育部長Ⅱ荻田三郎▽記念誌部長Ⅱ二見剛史▽事発部長Ⅱ中西景光△事務局長Ⅱ有村久行

腕組みて西郷像や雲の峰

(石峯) 住吉峻熊

高さ一メートル、重さ三〇トンの西郷隆盛像が空港前の広場に建立され、溝辺町はまた新たな脚光を浴びることになった。羽織・袴に威儀を正し、腕を組むこの巨像を仰ぐとき、すぐ思い出すのが「敬天愛人」の言葉である。

空港を見据る西郷の町興し

新村ツル

巨額の投資に住民の賛否論にもめげず東奔西走降幕の日を迎えた。あの巨大な体をゆすり喜ばれる西郷どんの姿を想像する時、溝辺を故郷とする私どもは、老若男女を問わずまた国際空港を持つ町として、町興しの一助にしなければと痛感する。

第四章 社会体育

一 体育協会の発足

本町の体育協会は、昭和三十七年四月一日、溝辺町における体育・スポーツ振興計画の立案、技術指導と助言、大会の開催などの事業を行い、スポーツに関する意欲を高め、町民の融和と体力の向上、さらには、健康で明るい郷土づくりを目的に設立された。

発足当時は、各種競技団体の代表、スポーツ少年団代表、地域スポーツ振興会（各大学）代表、体育指導委員連絡協議会代表、学識経験者などで構成されていた。初代会長に松山績、副会長に向井用雅成が就任し、協会運営に大いに寄与したが、いずれも故人とられた。体育協会の主な事業は、町内における各種スポーツ行事のほか始良地区体育大会、県民体育大会、始良地区駅伝競走大会に参加すること——などである。地区体育大会は陸上競技に好成績をのこし、駅伝は常にBクラス上位に定

着、昭和六十一年はBクラスで優勝した。

五十八年自治公民館制度の発足にともない、体育協会の組織も住民の積極参加を基本に組織改革を推進し、五十九年四月一日から新しい現組織が完成した。新しい組織構成は、大字代表が自治公民館に代わり、自治公民館連絡協議会長、同体育厚生部長、地区公民館長が新しく加わり、新役員として名誉会長を置くこととし、町長が就任することとなった。

〔体育協会役員〕

○名誉会長

有馬 四郎 59～60年

今吉 衛 61～現在

○会長

松山 績 37～44年

有馬 四郎 45～58年

今吉 耕夫 59～現在

○副会長

向井田雅成 37～56年

今吉 耕夫 57～58年

福永 忍 59～現在

○理事長

岩元 喜吉 37～43年

長野 久 44～47年

48～54年

岩元 勝芳 55～57年
山口 隆治 58～61年
長野 武弘 62年
森田 峯一 現在

○監事

小野 義行 48～58年
岩元 保雄 59～現在
村田 二男 48～現在

〔体育協会加入競技団体〕

団体名 代表者 部員・チーム数

ソフトボール	今吉 耕夫	三九チーム
バレーボール	山下 勝義	一七 "
ゲートボール	米丸 一夫	三八 "
野球	有村 四郎	一〇 "
弓道	今別府友志	一五名
柔道	中久保良一	八 "
陸上	重森 春紀	
バドミントン	竜岐 良己	一五 "
サッカー	安田英二郎	一七 "
剣道	向井田 孜	一〇 "
庭球	村田 睦	一六 "
卓球	衛守 正明	一五 "

二 体育指導委員の設置

体育指導委員は、町民の体育及びスポーツの振興をはかるため、スポーツ振興法の定めるところにより、溝辺町でも昭和五十年四月一日から設置発足した。

体育指導委員は、

①町民の求めに応じてスポーツ知識及び実技の指導を行う。

②スポーツ活動促進のため組織の育成をはかる。

③学校、公民館、その他行政の行うスポーツに関する行事に協力する。

④スポーツ団体などの行事の求めに応じ協力する。

⑤その他スポーツ振興のための指導をする。

などであり、体育指導委員連絡協議会を組織し活躍している。

○体育指導委員

50年 菊浦明治、前田文夫、竹下睦旺、上屋和夫、中

村歳文、今吉耕夫、福永忍、野村恵、萩原豊、

森口誠、川原清美

51年||德永春雄、前田文夫、竹下睦旺、上屋和夫、中

村歳文、川添睦夫、今吉耕夫、福永忍、野村

恵、萩原豊、森口誠、川原清美、中島啓爾

52年||德永春雄、前田文夫、竹下睦旺、浜田健一、中

村歳文、川添睦夫、今吉耕夫、福永忍、野村

恵、萩原豊、森口豊、川原清美、中島啓爾

53年||原口浩三、森口誠、新田正明、浜田健一、中山

誠、川添睦夫、今吉耕夫、福永忍、野村恵、西

野勝美、前田文男、川原清美

54年||森口誠、新田正明、浜田健一、中山誠、川添睦

夫、今吉耕夫、福永忍、野村恵、川野英継、前

田文男、今村日出子、坂口正浩

55年||手塚力、新田正明、堀脇薫、浜田健一、川添睦

夫、今吉耕夫、福永忍、野村恵、協門勉、今村

日出子、坂口正浩

56年||末永裕幸、川越廣海、新田正明、堀脇薫、梅山

和仁、川添睦夫、今吉耕夫、福永忍、野村恵、

西野勝美、協門勉、今村日出子、友枝健次

57年||末永裕幸、川越廣海、新田正明、堀脇薫、古市

雅利、重森春紀、今吉耕夫、福永忍、今村日出

子、西野勝美、海江田弘、野村文子、笹峯護

58年||新田正明、堀脇薫、古市雅利、重森春紀、今吉

耕夫、福永忍、今村日出子、西野勝美、海江田

弘、野村文子、笹峯護

59年||藏園輝美、淵脇秀憲、新田正明、花堂正光、隈

元仁志、重森春紀、今吉耕夫、福永忍、清本弘

子、馬場和美、海江田弘、野村文子、笹峯護

60年||藏園輝美、淵脇秀憲、新田正明、花堂正光、隈

元仁志、重森春紀、今吉耕夫、福永忍、清本弘

子、馬場和美、野村文子、笹峯護

61年||中谷和幸、元山達彦、本町俊彦、神田橋景光、

岩切澄夫、重森春紀、今吉耕夫、福永忍、清本

弘子、末重良規、森田二男、野村文子、笹峯護

62年||川越廣海、元山達彦、本町俊彦、神田橋景光、

岩切澄夫、重森春紀、今吉耕夫、福永忍、清本

弘子、末重良規、森田二男、野村文子、笹峯護

63年||新澤正和、元山達彦、内野眞、神田橋景光、岩

切澄夫、重森春紀、今吉耕夫、福永忍、清本弘

子、末重良規、森田二男、野村文子、笹峯護、

岩沢豊、長野清則

三 総合グラウンド

(一) 建設

溝辺町は町のほぼ中心地を町民の総合レクリエーション地域とし、昭和四十七年コミュニティセンターを設置、この周辺を上床公園と命名した。しかし住民が自由に利用できる体育施設がなく、町民体育祭や、各種スポーツ大会などは、学校の教育施設を利用していたで、体育の資質の向上と、スポーツを通じて町民の融和を深めるため、総合グラウンドの建設に着手した。総合グラウンドは、昭和四十八年度国民運動場建設補助事業として同年十一月一日着工、翌四十九年五月三十一日完成、町民待望の競技場として開放された。完成当時の主競技施設は、二〇〇メートルコース及び一〇〇メートル、野球場などであったが、このことからソフトボールの普及がめざましく、ソフトボール場としてBコートを増設、A・B両コートで試合ができるようになった。町内初のナイター照明施設も、昭和五十三年七月に増設され、シーズン中は常に多くの利用者があり、中高年

層のスポーツに対する理解と参加が得られるようになった。

ナイターの利用期間は、四月一日から十月三十日まで午前、午後、夜間となっているが、終日利用もある。昼間より夜間の利用が多く、予約をとって使用許可しているが、申し込みを消化できない場合もある。

昭和六十一年度事業でAコート、Bコートの排水施設工事を約三五〇万円をかけて整備した。

〔総合グラウンドの概要〕

面積 一万三九七〇平方メートル

競技施設 二〇〇メートルコース、一〇〇メートル

ス、野球場、ソフトボール場

附属施設 管理室、更衣室、便所、ダッグアウト四基

夜間照明施設 照明塔（当初）六基、水銀ランプ投光

器四八台

建設事業費 五九六八万一〇〇〇円

造成 四二五一万五〇〇〇円

付帯設備 一六五九万四〇〇〇円

照明施設 二六六七万五〇〇〇円

用地費 七七〇万円

その他

二〇九万七〇〇〇円

○追加事業

照明塔増設（昭和五十三年度）

三〇〇万円

ダッグアウト施設

（昭和五十五年） Aコート

三〇万円

（昭和五十六年度） Bコート

三〇万円

グラウンドの排水整備

（昭和六十一年度） Aコート・Bコート

三四九万五〇〇〇円

（二）夜間照明施設の改修

総合グラウンドの夜間照明は、設置以来一五年を経過し、一部欠落などがあり、危険と効率低下のため、昭和六十二年度に事業費一九八〇万円（全額町費）で全面改修した。今回の改修工事により、旧施設の照度を落とすことなく消費電力の軽減をはかるため、水銀ランプ六〇割とナトリウムランプ四〇割の混合方式とすることで快適な環境を作ることができるようになった。

ソフトボール使用時四基点灯、軟式野球は七基点灯の二とおりの使い分けができるようになった。Bコートで

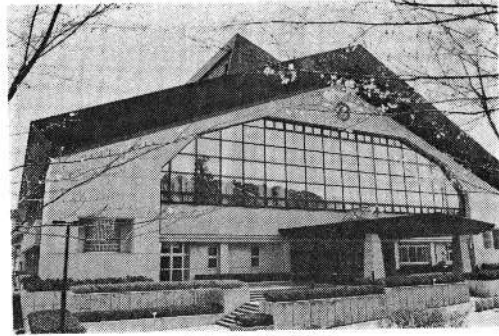
はソフトボール使用専用の考え方で四基点灯区分ができる。全点灯時は、一一基点灯、水銀ランプ四八台、ナトリウムランプ二八台、全体照度は約二三ハルクスである。ランプの平均寿命は、水銀ランプ九〇〇〇時間、ナトリウムランプ一万二、〇〇〇時間となっている。

今回の改修の特長は、点灯についてコインタイマー式に改善したことである。コイン一枚でソフトボールの場合、三〇分使用でき、野球の場合、二〇分使用できる。コインは最高六枚まで投入でき、途中追加もできる。

四 総合体育館

スポーツは年々盛んになり、あらゆる種目に多様化してきている。しかし本町の屋内運動場は学校の体育館しかなく、学校開放により一般の利用に供してきたが、利用時間の制限や、管理運営の方法などの問題もあり、総合体育館の建設が必要に迫られた。そこで左の計画にもとづき建設をめざした。

○五十六年三月、議会で「社会教育施設等建築基金条例」を制定。



総合体育館外観

○五十八年、総合体育館建設委員会を設置。県内の現地研究を含め協議検討し、

県及び関係者の助言をいただき、昭和五十九年度単年度事業として建設することに決定。

○五十九年一月、指名委員会を開

催、株式会社鮫島建築設計事務所に設計依頼。

○五十九年五月 文部省所管公立社会体育施設整備事業として採択内示をうける。

○五十九年五月二十五日、本体工事一七社、電気設備工事一三社、給排水衛生設備工事一社により入札の結果、

本体工事

電気設備工事

青木・中島建設共同企業体

九州電気工事

給排水衛生設備工事 黒木電器水道工事店
が落札、着工のはこびとなった。

○昭和五十九年九月、ステージ照明、音響設備、暗幕設備など舞台設備を三晃工業が追加工事。

こうして昭和六十年三月二十五日完成、四月十四落成式を行った。式典では竹ノ内照子さんの祝賀の舞、向井田孜さんの居合道、最勝寺良寛さんの空手道演武を披露、鹿児島純心高校新体操チームが特別出演して華麗な演技を見せてくれた。ついで同年四月十六日から一般開放した（使用料は第14表のとおり）。

〔工事概要〕

○名 称 溝辺町総合体育館

○構 造 鉄筋コンクリート（一部鉄骨）

○総工事費 五億九〇一〇万二〇〇〇円

・ 国庫補助金 一億二四六万七〇〇〇円
・ 起 債 二億四八五〇万円
(年金資金)

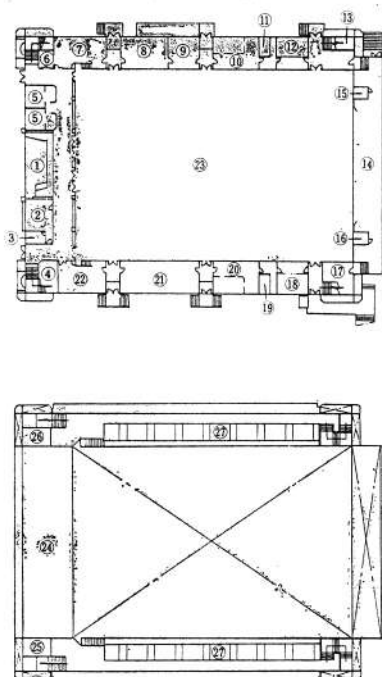
・ 積 立 金 一億七〇〇〇万円

・ 一般財源 四九一三万五〇〇〇円

○工 期 昭和五十九年五月二十九日～昭和六十年

三月二十五日

第52図 総合体育館平面図



- ①玄関・ホール ②事務室 ③湯沸室 ④医務室 ⑤一般用便所
 ⑥身障者用便所 ⑦会議指導室 ⑧一般トレーニング室 ⑨児童
 トレーニング室及び身障者観覧室 ⑩女子控室 ⑪女子シャワー
 室 ⑫女子便所 ⑬消火栓ポンプ室 ⑭ステージ ⑮放送室
 ⑯調光室 ⑰器具庫(2) ⑱男子便所 ⑲男子シャワー室 ⑳男子
 控室 ㉑器具庫(1) ㉒体力健康相談室 ㉓一階競技場 ㉔二階競
 技場 ㉕倉庫(1) ㉖倉庫(2) ㉗観覧席

〔競技場設備〕

○一階競技場 四九・五呎×三四・〇呎＝一六八三平

○敷地面積 六六一一平方呎
 ○延床面積 三七八六・二八平方呎 一階 二八二八・
 五平方呎 二階 九五七・七八平方呎
 収容人員 競技場 約二五〇〇人
 観客席 五五二人

○二階競技場

・卓球(四台) 方呎
 ・バレーボール(三面) ・バスケット
 ボール(二面) ・バドミントン(八
 面) ・軟式庭球(三面)
 九・一呎×三四・〇呎＝二〇九・四平

第149表 使用料

使用区分		使用時間		8時30分から 12時まで	12時から 17時まで	17時から 22時まで	照明使用料 1時間当たり
専用 使用者が入場料を徴収しない場合	アスレチックに使用する場合	児童・生徒	500円	600円	700円	2,000円	
		上記以外の者	1,000				1,200
	文化的催し物に使用する場合 (営利又は宣伝を目的としない)	3,500	4,000	5,000			
	その他の場合	6,000	8,000	15,000			
専用 使用者が入場料を徴収する場合	アスレチックに使用する場合	3,000	5,000	7,000			
	文化的催し物に使用する場合 (営利又は宣伝を目的としない)	6,000	10,000	15,000			
	その他の場合	20,000	25,000	30,000			
一部使用 (個人使用を含む)	種目	使用者区分	単位	1時間につき	備考	照明使用料 1時間当たり	
		児童・生徒 上記以外の者	1台	30円	ラケット、球は除く	100円	
	卓球	児童・生徒 上記以外の者	1面	50	ラケット、ジャネットコックは除く	300	
		児童・生徒 上記以外の者	1面	50	ボールは除く	300	

バレーボール	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボールは除く	300
	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボールは除く	300
バスケットボール	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
テニス	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
武道	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
軽スポーツ及びダンスレクリエーション活動	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
	児童・生徒 上記以外の者	1面	100 200	ボール、ラケットは除く	300
附風設備等使用					

附記

- 1 専用使用で許可時間を延長した場合の使用料は延長1時間（1時間未満の端数があるときは1時間とする）ごとに延長する時間区分の使用の1時間当りの額に2割を加算した額とする。
- 2 使用者が本町の住民でない場合の使用料は上記使用料に5割を加算した額とする。
- 3 使用時間は会場の準備及び後整理の時間を含むものとする。

五 テニスコート

溝辺町は、町民の体位体力の向上、健康づくり、仲間づくりや親睦を目的に、昭和四十九年度に総合グラウン

ド、五十九年度には総合体育館を建設し、社会人に対する体育振興をはかってきたが、さらに、テニスコートを設置することとなった。

テニスコートは、上床公園総合グラウンドの南側に造成を行い、照明施設のある近代的なコート三面、及び便

所、更衣室ほかを備えている。コート面は盛り土造成地であるため、オイルサンドである。

〔テニスコートの概要〕

○コート 三面（二二八六平方呎、オイルサンド構造）

○照明 一灯用六基、二灯用六基、計一八灯

○付帯設備 便所、更衣室ほか（七七平方呎）

○事業費

用地取得費 三五〇万円

設計費 造成設計Ⅱ六五万円、コート設計Ⅱ八〇万円

工事費 造成工事Ⅱ一四三九万四〇〇〇円（施

工・国土建設）、コートⅡ二三四〇万円

（施工・東亜道路工業）、照明Ⅱ一一〇〇

万円（施工・九州電気工事）、フェンス

Ⅱ六四万円

第五章 顕彰

本町は、古くから行政、産業、教育、民生、その他各方面にわたって優秀な人材が輩出し、町政発展の原動力となつて活躍してきた。町は、昭和五十一年十一月、溝辺町表彰条例を制定し、功労者として顕彰している（該当者は第二部第二章の「町民表彰」にあり）。

一方、町政のみにとどまらず、県あるいは全国単位の組織にあつても重要な地位にあつて、それぞれの事業に貢献し、各界の発展に尽くした功績によって表彰の榮に浴した個人及び団体も数多い。本人のみならず、町の名譽として、永くその榮譽をたたえ、ここに記録する（国の機関または全国単位の組織・団体の表彰のみにとどめ、そのほかは割愛。カッコ内は表彰者）。

〔個人〕

○有馬四郎

・国土（地籍）調査推進に功績Ⅱ55年2月5日（社団法人全国国土調査協会長本名武）、56年6月13日（国土大臣・国土庁長官原健三郎）、61年6月20日

（国土大臣・国土庁長官山崎平八郎）

・土地改良推進に功績Ⅱ61年10月14日（農林水産大臣加藤六月）

○黒木公博

・身体不自由を克服し、自力更生に努力Ⅱ61年12月9日（厚生大臣斎藤十朗）

○佐藤山人

・学校保健の普及向上に功績Ⅱ62年10月22日（文部大臣塩川正十郎）

○村田三夫

・学校給食の振興に功績Ⅱ59年9月6日（文部大臣森喜朗）

○今吉進

茶業発展に功績Ⅱ54年11月9日（日本茶業中央会長西村直己）

○村田哲二

・農協金融事業の発展に貢献Ⅱ49年2月15日（農林中央金庫理事長片柳真吉、全国信連協会会長高橋七郎）

〔団体〕

○溝辺町学校給食センター

・学校給食調理場運営に優れた成果Ⅱ59年9月6日

(文部大臣森喜朗)

○溝辺町献血推進対策協議会

・献血の推進に貢献Ⅱ61年7月23日(厚生大臣斎藤十朗)

○鹿児島県共同募金会溝辺町分会

・貯蓄推進運動に成果Ⅱ45年2月6日(農林中央金庫、全国信用農業協同組合連合会)

・多年にわたり共同募金運動に功績Ⅱ(56年11月17日)(社会福祉法人中央共同募金会会長灘尾弘吉)

○溝辺町

・町村自治の健全発展Ⅱ50年1月31日(全国町村会長河津寅雄)

(河津寅雄)

・森林国営保険事業の発展に寄与Ⅱ60年10月1日(林野庁長官田中恒寿)

○溝辺町議会

・優良議会Ⅱ47年2月10日(全国町村議会議長会)

○溝辺町結核予防婦人会

・結核予防事業に貢献Ⅱ52年4月22日(財団法人結核予防会総裁雅仁親王妃勲一等勢津子)

○溝辺町農業委員会

・全国農業新聞の普及に成果Ⅱ62年4月8日(全国農業会議所会長松垣徳太郎)

○溝辺町農業協同組合